

ISSN 2433-2712

# 記主禪師研究所紀要

第1号

大本山光明寺記主禪師研究所

記主禪師研究所紀要

第1号

大本山光明寺記主禪師研究所

JOURNAL  
OF  
KISHUZENJI RESEARCH INSTITUTE

NO.1

Published by  
KISHUZENJI RESEARCH INSTITUTE

*Komyoji, Main Temple of Jodo Shu*

*KAMAKURA, JAPAN*

# 記主禪師研究所紀要 第一号

## 目次

刊行の辞	柴田哲彦台下	(一)
基調講演		
浄土宗三祖長忠上人讃仰―伝法の視点から―	柴田哲彦台下	(三)
論文		
大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本について(一)―模本流伝の経緯とその背景―	大谷慈通	(七)
大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本について(二)―三種の模本との比較を中心に―	杉浦尋徳	(三)
資料		
『当麻曼陀羅縁起』模本 三本対比(全)		(五)
彙報		(六)
記主禪師研究所規則		(六)
運営委員・所員一覧、執筆者紹介		(七)
編集後記		



## 刊行の辞

大本山光明寺法主 柴 田 哲 彦

大本山天照山光明寺は浄土宗第三祖、然阿良忠上人記主禪師によつて開創された浄土宗切つての名刹である。

浄土宗は、宗祖法然上人が唐の善導大師の撰述になる『観経疏』と出会い、そして夢定中における対面によつて、本願称名の念仏により全ての凡夫が浄土往生が叶うとの確信を得て開かれた宗である。その教えは鎮西の二祖弁阿聖光上人に伝えられ、更に三祖然阿良忠上人へと継承された。この法系の教えが所謂「二祖三代」の教学と称され浄土宗教学の根幹となり今に至っている。

特に三祖良忠上人の門下には、良暁・性心・尊観・道光・然空・慈心等、俊英有徳の碩学を多く輩出した。三祖良忠上人を御開山と仰ぐ大本山光明寺は、その伝統を脈々と伝えていく寺院と云えよう。

浄土宗開宗八五〇年の佳辰も目睫の間に迫ってきた。ここに宗祖ならびに御開山報恩謝徳の一環として、大本山光明寺内に記主禪師研究所を設立し、所期の目的のため研究研鑽に励んでいただくことになった。既に公開研修会等も数回開催され、また研究員による学会の発表もなされてきた。

今回その研究成果の一端を世に出す機会を得たことは、誠に欣悦の至りである。この第一号を起点として、更なる研究成果、更なる充実発展を祈念し刊行の辞といたします。



## 刊行の辞

大本山光明寺法主 柴 田 哲 彦

大本山天照山光明寺は浄土宗第三祖、然阿良忠上人記主禪師によつて開創された浄土宗切つての名刹である。

浄土宗は、宗祖法然上人が唐の善導大師の撰述になる『観経疏』と出会い、そして夢定中における対面によつて、本願称名の念仏により全ての凡夫が浄土往生が叶うとの確信を得て開かれた宗である。その教えは鎮西の二祖弁阿聖光上人に伝えられ、更に三祖然阿良忠上人へと継承された。この法系の教えが所謂「二祖三代」の教学と称され浄土宗教学の根幹となり今に至っている。

特に三祖良忠上人の門下には、良暁・性心・尊観・道光・然空・慈心等、俊英有徳の碩学を多く輩出した。三祖良忠上人を御開山と仰ぐ大本山光明寺は、その伝統を脈々と伝えていく寺院と云えよう。

浄土宗開宗八五〇年の佳辰も目睫の間に迫ってきた。ここに宗祖ならびに御開山報恩謝徳の一環として、大本山光明寺内に記主禪師研究所を設立し、所期の目的のため研究研鑽に励んでいただくことになった。既に公開研修会等も数回開催され、また研究員による学会の発表もなされてきた。

今回その研究成果の一端を世に出す機会を得たことは、誠に欣悦の至りである。この第一号を起点として、更なる研究成果、更なる充実発展を祈念し刊行の辞といたします。



## 浄土宗三祖良忠上人鑽仰―伝法の視点から―

柴田哲彦 台下述

私もこの光明寺にご縁を頂きまして、前の大僧正、宮林昭彦台下とは本当に兄と弟のように親しくさせて頂いた間柄でもあります。また、先ほどはるばる九州の久留米の大本山善導寺の阿川文正大僧正台下から祝電を頂戴いたしました。本当に感極まった次第でございました。

阿川台下は私と師弟関係という形になります。昭和三六年、私は他大学から大正大学大学院に入学しました。その時にちょうど新任の講師になられたのが阿川台下でした。当然、学部の講師と大学院生ですから直接ご指導を受ける機会は無かったです。私が資格取得のために学部の僧階単位をいくつか取らせて頂いて、その一つに浄土宗史がありました。そのご担当が阿川台下でございました。そんなことから阿川台下にお教えを頂きまして、爾来五五年以上、ご指導頂いております。

さて、この大本山光明寺に最初にご縁がございましたのは今から六五年ほど前です。夏期僧堂の折、中学二年の頃でした。夏期僧堂は三回目に参加でありました。非常に大勢の方がお見えでございましたが、ほとんどが高校生、大学生でありました。その時にたまたま記主研究所長また光明寺前執事長の長谷川昌光先生と私の二人が中学生でございまして、二人そろって境内を歩きながら色々楽しく勉強をさせて頂いたのは、本当に強い印象として今でも残っております。

ただ子供ながらに思いましたのは、その頃この光明寺は非常に荒れ果てておりました。今とは全然違います。こ



れで良いのだろうかと言うような思いでありました。その時に大殿でご本尊様をお参りさせて頂き、またこの開山堂で記主禪師良忠上人をお参りさせて頂き、考えてみると長いご縁を頂いていたのだなと思います。

さらにこの光明寺に入りまして考えてみますと、里見執事長は私が教区の浄青会長をやらせて頂いた時の重要な常任理事のメンバーに連なって頂き、あるいは色々な方々のお支えを頂きました。

そしてこの記主研究所も考えてみますと、浄土宗布教師会の理事長の際、事務局長をして頂いていたのが本研究所の長谷川所長であります。また阿川台下にご縁を頂き、増上寺の伝宗伝戒道場、聖書伝授道場は私が引き継ぎました。私のあと、大正大学の仏教学部長でもあり、記主研究所の主任研究員をお勤めいただく林田康順先生に勸誠を引き継いで頂いております。

さて、なぜ記主研究所を創設したかと申しますと、最初の思いは、実は入山してすぐ京都の野田先生からお手紙を頂きました。伝法の内容について尋ねたいと書いてありました。幡随意流の箇条伝法の傳承が二つあったと思うのですが、どうでしょうかと言われました。しかし、しっかりと把握できておりませんでした。そのようなことから大光院様の伝書目録も精査したのですが、確かに幡随意流の箇条伝法の写本が二本現存しておりました。こうしたことから、色々な意味で資料の確認、保存そして研究、そういう研究機関がどうしても欲しいとずっと考えておりました。

住職三年もの言わず、といわれておりますが、数年間は黙っておかねばと黙っていたところに、ここにいる成田善俊上人が背中を押してくれまして、じゃあやろうかと話が進みましたが記主研究所の発足でございました。まさかこんなに早く、立派に充実した方々によって研究所が立ち上がるとは本当に夢にも思わなかったような次第でございました。

幸いにして神奈川教区は非常に今、学人が揃っております。しかも宗学の研究者が揃っております、これは良いチャンスだということでのこのような研究所を設立し、それとまた示唆を与えて頂いた鎮西研究所の総裁で

もいらつしやいます阿川台下に色々とノウハウを教えて頂きました。鎮西研究所は記主研究所の設立より先行でございまして実績も上げていらつしやる。鎮西研究所に追いつけ追い越せというようなこともありまして、このようなことになったわけでございます。

今日は基調講演と言われるような、そのような大それたことではございません。私も研究の第一線から離れまして、もうしばらく経っておりますが、今も研究、特に伝法への強い思いは持っております。

私が出身の蓮勝寺は、三祖良忠上人の孫弟子が開山でございますので、これまでも三祖良忠上人に対する思いが強くなりました。今日は「浄土宗三祖良忠上人鑽仰―伝法の視点から―」というタイトルでお話をさせていただきます。私は、伝法という場を通して、そして三祖良忠上人に対する思いがずっとありましたので、その一端だけでもお話をさせて頂きたいと思えます。

まずは、浄土宗の伝法は今一体どうなっているのかということから、話を進めさせていただきます。

最初の二祖相承とは、善導大師から法然上人に浄土の本願、称名念仏の教えが相伝されたわけでございます。これには依憑相承と直受相承があります。依憑相承とは経巻相承とも言われますが、書物によって伝えられているということになります。直受相承とは、直々に受ける相承で、内証相承とも申します。

元久二年（一二〇五）、興福寺奏状の笠置の貞慶が、法然上人の専修念仏を論難、非難しました。法然上人の御遷化の六年前ということになりますが、その非難内容とは、法然上人は直々に中国へ或いはインドへ行って法を授けてもらっているのかというものでした。仏教においては伝統的に直に法を受けるということが非常に大事なことです。

順阿隆円の『吉水瀉瓶訣』には「唯授一人」というフレーズが出てきますが、伝法というものは本来、師匠から弟子へ一対一で行われるものです。現在の伝法は一対多であります。伝宗伝戒道場或いは璽書伝授道場にしても伝灯師の大僧正から大勢の方が一度に受ける。しかし原則は「唯授一人」であります。たった一人であります。私が

増上寺の教誡をお引き受けした時に、相伝から外れなければどのような教誡をしても良いけれども、とにかく「唯授一人」という思いだけは伝えて頂きたいと、これが先代であった阿川台下からのご指導でした。従って「唯授一人」というのは命がけであります。本当に真劍勝負であります。そのような思いで伝法は授けなくてはならないし、受けなくてはいけない。これを非常に強い口調で教えて頂いたことを今でも思い起こします。

この典型が善導大師から法然上人への相伝であります。先ほど申し上げました貞慶の非難を受けたものかわかりませんが、浄土宗では法然上人は善導大師から直々に法を受けております。どのように受けているかと申しますと、それは夢の中で善導大師に会いまみえ、そして直々に法を授けて頂いたわけです。

聖岡上人の弟子であり、増上寺の開山でもある西誉聖聰上人に『浄土三国仏祖伝集』という御著作があります。その中に夢を取り上げていらつしやいます。そのなかで『摩訶僧祇律』を引用し、「夢の類に五種有り、一つには実夢、二つには不実夢、三つには不分了夢、四つには夢中見夢、五つには前想後夢」という五つの夢に関して説示されております。

現代の深層心理学、ユング等によつて夢の研究が進んでおり、非常に夢が脚光を浴びております。法然上人を非難した梅尾の明恵上人は三五年間、自分で見た夢を記し続けて、『夢記』として残されています。ごく最近も関連する著作が刊行されておりまして、河合隼雄氏などが取り上げて、夢はある意味で現代に脚光を浴びているジャンルであると指摘しております。それを仏教では二千年も前から、ずっと研究されてきました。その一つが『摩訶僧祇律』に紹介されているわけです。「不実夢」とは不確実な夢、「不分了夢」とははっきりわからない夢、「夢中見夢」とは夢の中で夢を見る夢、「前想後夢」とは前に想つたことを後になつてすぐに夢に見る、といったように色々なことが研究されていますが、それを『浄土三国仏祖伝集』で西誉聖聰は紹介しております。

その中で承安五年（一一七五）に、法然上人が善導大師に、春三月一四日、夢の中で会いまみえて相伝を受けました。これは実夢の中の実夢であります。実際に相対して「唯授一人」よりも更にしっかりとした形で行うように

捉えております。我々浄土宗は夢定中における二祖の対面が、わが浄土宗の称名のお念仏の基盤となっていることをしっかりと確認しなければならないのであります。

これを文字でもって論述したのが『貞伝集』で、非常に珍しい書物であります。調べたところでは東北大学の狩野文庫に一本、そして私が一本持つております。これは西誉聖聡、つまり聖岡の弟子が伝え述べたことを、聖聡の弟子の了暁が承ったものであります。

了暁とは了暁慶善であります。飯沼弘経寺の第二世であります。その門下生には五重相伝を始めた勢誓愚底や、或いは知恩院の二二世である周誉珠琳がおり、白旗派の教線を京都にまで拡張し、非常に重要な役割を果たした方です。この人が書きしたためました書でございます。この書に次のようにあります。

袖書に究竟大乘等の文在る事を無相伝の人は上人の御詞だと云ひ、鎮西の釈と云ふ皆誤りなり。此の文は、上人四十三の承安五年三月十四日の夜半、半金色の善導大師が夢中に來たりたまひて、浄土の真門、西天伝來の秘蹟、悉く上人に授け畢りぬ。時に晴天虚空の中、紫雲の上に即ち二十八宿の、暗夜に浮く如く金字にて、此の四句二十八字連个として羅列す。則ち浄土伝法要偈なりとて重ねてこれを授けたまふ。

これが基本であります。我が浄土宗が存在し得る根本こそ、ここにあります。

その大事な要偈がどこにあるかと申しますと、良忠上人の弟子であります良暁上人が弟子の賢仙に与えたものが、現在滋賀県伊香立の新知恩院に所蔵されております。これは元亨四年（一三三四）にしたためられた書物でございますが、それより二年古い書物が越前敦賀の西福寺にある、全く同じ筆跡であります良暁筆の「寂真伝承本」があります。

四七年前に私が書いた『末代念仏授手印』伝承本の一覧表があります。執筆後、平成二七年には史学の大家である野村恒道先生に調査の同行をお願いして、訂正いたしました。「忠空伝承本」は四国宇和島の大超寺に所蔵されておりました。阿川台下と一緒に研究をしておりました頃には、この書物は散失してりましたが最近出てきました。

何えは、部屋をリフォームするにあたってそこにあるものを廃品回収の業者に処分を依頼したところ、タンスの上に書物が置いてあり、それが貴重な「忠空伝承本」だったというわけです。お蔭で本物を見ることができました。そのようなこともありまして訂正をしております（柴田哲彦台下『西方の通津』菊名山蓮勝寺、平成二七年刊に収録）。

「白旗系伝承本」のうち、一番古い書物が「寂真伝承本」であります。「寂真伝承本」の成立は元亨二年（一三二二）、かたや「賢仙伝承本」は同じ寂慧筆ですが元亨四年であります。通常であれば一般的な関連では古い書物から底本として成立しますが、林彦明先生が、昭和七年に『昭和新訂 末代念仏授手印』を出版され、さらに昭和一三年に『三卷七書』をご出版されております。皆、底本を変えております。文献として見ている時には国師本の二祖直筆と呼ばれる「聖護伝承本」を使っております。ところが六年後に刊行された『三卷七書』は浄土宗の伝法のための『三卷書』の授手印でありますので、良忠上人や良暁上人の白旗系の書物を採用されています。底本一つにしても疎かにはしてはいけないとしみじみ感じました。

では何故「寂真伝承本」を使用しなかったかと申しますと、先ほど申し上げました元亨四年（一三二四）に良暁上人から賢仙に相伝されたものを見ますと、長禄四年（一四六〇）三月一六日、宗戒両脈相伝の右に、白旗の上人（良暁）からご自筆の書物を頂戴したと周誉珠琳が署名しております。周誉珠琳は知恩院二世、そしてこの辺りから鎮西白旗派が一気に全国に広がります。その拠点になりましたのが周誉珠琳の頃であります。これ故、殊更に「寂真伝承本」を使わずに林彦明大僧正は「賢仙伝承本」をお使いになったのだと感じました。

これを我々は「林彦明本」として散々見ておりましたし、今から二〇年以上前に阿川文正大僧正が現役の頃、『浄土宗聖典』の編纂をお引き受けになり、私は編集の実務を頼まれました。また、周辺には林田先生や糸原恒久先生を初めとして学者の方々が大勢いらっしゃいました。そういった環境に恵まれていましたので、我々のグループで『浄土宗聖典』を刊行いたしました。その時に底本は全て「林彦明本」に依ることになりました。従って我々

が『末代念仏授手印』を研究するような時には、いつも林彦明先生が依った「賢仙伝承本」を見ております。それほど「賢仙伝承本」は重要な書物であると考えております。

そのような「賢仙伝承本」を中心としまして、今、我々は『末代念仏授手印』を勉強しているということになりますが、私が記主禪師良忠上人をずっと意識していたのは一つの想いがあります。賢仙の伝承された弟子の良暁の書物は見ましたが、良忠上人直筆の『末代念仏授手印』は見えておりません。どこにあるのだろうかという思いを忘れずに今日まで生きてまいりました。知恩院七五世である養鷗徹定上人の『末代念仏授手印』の跋が明治一四年一二月二六日付で書かれております。その割注に記主禪師所伝本は武州小机泉谷寺に有り。つまり当山の先々代の執事長のご自坊であります。これを確認した時には阿川台下と泉谷寺へ行きましたが、現存しておりませんでした。その中で写しに、関東十八檀林の随一川越蓮馨寺にあると書かれておりました。そこで桑原先生が学生時代の頃、お邪魔をいたしまして拝見したところ写しがありました。しかし、今日に至るまで記主禪師良忠上人所伝の『末代念仏授手印』を探しておりません。もしも、皆さまが良忠上人所伝の『末代念仏授手印』を発見されたら世紀の大発見であります。ぜひ心に留めて頂きたいと思うところであります。そのようなことで現在、良忠上人のものはございませんが、弟子の良暁のものはあるということでこれを利用いたします。

三相良忠上人は九州善導寺に縁あつて生仏の勤めにより赴きました。そして嘉禎二年（一二三六）九月八日に天福寺において聖光上人とはじめて会いまみえたと『決答授手印疑問鈔』に記述されております。現在でも天福寺は立派な寺院であります。もし九州においていなくなる機会があればぜひお参りしてください。そのお寺の前方に良忠上人が止宿された地福寺の跡がございます。天福寺に私も何回か訪れたことがあります。地福寺跡はとても寂しいものであります。畑の一隅に石碑が数基ございました。浄土の末流の我々としては地福寺の整備をしつかりとしたいかなくってはならないと、申し訳ない気持ちを抱きながら涙する想いで天福寺・地福寺に参拝しております。

その時に先師である聖光上人は七五歳、弟子の記主禪師は三八歳でありました。二ヶ年の間に『観経疏』、『法事讃』、

『観念法門』、『往生礼讃』、『般舟讃』、『往生論註』、『安樂集』、『選択集』、加えて『徹選択集』まで聖光上人から教えを頂戴いたしました。そして『往生要集』並びに『十二門戒儀』、円頓戒であります。ただ『般舟讃』に至っては、法然上人の時代には日本に流伝しておりませんでしたので、聖光上人は法然上人の教えを聞いておりませんでした。経論の意味合いを読み込んでお伝えします。これは全て「唯授一人」であります。一対一の命がけでお伝えなさっていることが理解できます。

齡頽て在世久からず。将来の癡闇を思ふに肝腑安からず。然りと雖も我が法は然阿に授け畢んぬ。

法燈何ぞ銷ん。然阿は是れ予が盛年に還るなり。遺弟此の人に対して不審を決すべしとなり。〔決疑鈔〕五）  
このようなお言葉を二祖からあずかるくらい、しっかりと相伝を受けております。そして本願称名念仏の義をしつかり受け止めています。

鎮西聖光上人から三祖良忠上人への系統でなければならぬものがあります。それは「靈書手次」です。

そしてもう一つなければならぬものは四句の偈です。国師本に「円阿伝承本」がございます。これは博多の善導寺に今でも収蔵されております。その袖書には「釈尊の説教を信じ、弥陀の本願を憑む。娑婆の旧宅を出で、極楽の新蓮に遊ぶ」とあります。中々良い言葉ではありますが、しかしそこには、我々が四句の偈に抱くような深いものを感じることはできません。

そのようなことからますます要偈が重要になりますが、この要偈こそ、承安五年（一一七四）三月一四日、法然上人が夢定中で善導大師から直々にお授かりを頂いたものであります。どのようなことがあっても思い取らなくてはならないことであります。これがなければ浄土宗は成り立ちません。

阿川文正台下がよく仰いますが、我々は真理を探究するのであります。真理とは自然科学的な真理と同時に宗教的な真理があります。これが大事であります。例えば、キリスト教では、処女マリアからキリストは誕生しました。自然科学的な論理から考えれば処女から子供が誕生することはありえません。しかし、宗教的な真理から考えると

それは全くありえることであります。このように処女マリアからキリストが誕生したという話が否定されていたならば今現在キリスト教は存在しておりません。そのようなことから、宗教的真理の存在を我々は考えておかなければいけないと思う次第であります。

そして、伝々相承して源空―弁阿―良忠―良晁―賢仙、このような次第をして相伝されてきたわけでありませんが、考えてみますとその後、聖岡が輩出されますが、この聖岡上人が浄土宗伝法の整備をいたします。

系譜を見ますと法然上人から聖光上人、そして良忠上人、そして良晁であります。次はどうなるかと申しますと、四相良晁の後に二人挙げます。定慧と蓮勝であります。ここで浄土宗の伝法は二系統に分かれます。定慧の系統を本山伝と申します。また、蓮勝の系統を末山伝と申します。その後、蓮勝の系統は了実、了誉聖岡が出てまいります。定慧の系統は聖満、祐崇、牛秀であります。

その時、実に秀才な了誉聖岡が現れるわけです。この了誉聖岡が輩出されなければ五重伝法は存在しておりません。了実は師匠の蓮勝に師事するようにと聖岡に申しました。蓮勝はさらに定慧に師事するようにと聖岡に申しました。その定慧がいたのが現在の小田原の浄蓮寺様であります。この地で七祖了誉聖岡によって本末が合流いたしました。

ちなみに、系譜が次第してきた際、この光明寺にも「壘書手次」の系譜が本来であれば存在するわけですが、現存しておりませんでした。ところが最近発見され、川越の蓮馨寺に所蔵されておりました。近々にこの模写本が光明寺に寄贈されることとなりました。光明寺の七百年の歴史の中でも、特筆すべき大事業であります。この系譜を見てみますと本山伝の「壘書手次」の全体を確認することができます。今回、記主研究所が発足されて非常に心強く思っておりますが、色々と研究をしなければならないことが山積しております。

『末代念仏授手印』に戻りまして、重要なのは善導寺に所蔵されております「生極楽伝承本」です。この「生極楽本」は安貞二年(一二二八)に述作されました。その時に集まっていた結集名があります。実はそのなかに「然阿」と入っ



ております。初めてお会いになったのは伝記の上では嘉禎二年（一二三六）です、それがここに然阿とある。この然阿は三祖良忠上人なのか、同名異人なのか、これもまだ検討の余地があると思います。仮にもし、この然阿という人物が三祖良忠上人であったならば、伝記で語られる七、八年前にもうすでに二祖に師事していたということになります。これも今後の研究が待たれるところです。

ちなみに「生極楽本」の現物を見ますとちゃんと花押が見えます。この花押と讓状の花押の比較研究をしなくてはなりません。実際に三祖良忠上人直々にしたためられた書物をもみても、似ているか否か非常に微妙です。雰囲気は似ています。これには随分悩まされております。この然阿を良忠上人とみるのか、別人とみるのか、然阿一人説、然阿一人説というようなことも今後の研究の対象にしていきたいと思えます。阿川台下はこれを同名異人ではないかというのですけれども、同名異人とすればどういふ人物であったのか、それはやはり調べておく必要があるのではないかと私は思っております。

『五重指南目録』において、五十五箇条にまとめて、今の「唯授一人」で与えるべきものを組織的に一對多で相伝出来るように組織してくださった、これも了誉聖阿上人の貴重な功績であります。五十五箇条を段階的に『往生記』『授手印』『領解鈔』『決答鈔』そして最後『論註』というように五段階に配当しております。

先程の続きに入りますけれども、聖阿が出現されたことよって浄土宗の伝法は組織化されて、しかも一對多ということも可能となり、教団発展の一つの根拠になるのであります。

『記主禪師行状絵詞伝』をみますと、聖光上人から良忠上人へ法を伝える場面が描かれております。私たちの伝法は、こういう形式だったのではないかと思えます。師匠が高座にいて、そして一つ一つ丁寧に細かく、しかも一對一本当に真劍勝負のような形で相伝をしていた、その絵がこれは復元されているのではないか、ということ、ご紹介をさせて頂きます。

そういうことからしますと、この五重伝法が創案されたということは、非常に画期的なことであったと思えます。

その結果、増上寺の九世道誉上人、一〇世感誉上人、その頃になりますと箇条伝法という形になります。それまでは大五重（総五重）となっております。

光明寺の五八世義誉観徹という方がいらつしやったのですが、その方が『総五重法式私記』を著しておられまして、当時の大五重の相伝の仕方が書いてあります。そこでは五十五箇条を総まとめしておられます。非常に整備されたものですが、そこに初重、二重、三重、四重、第五重と分類されております。

ちなみに、五重相伝の場合、「五重」というと五重相伝が五番目の五重なのか分かりませんので、そこだけは第五重と言います。私が大学院時代でありましたでしょうか、五重に関する研究発表をしました時に当時の佛大教授でいらつしやった坪井俊映殿下が手を挙げてくださいます。「あなた五番目を五重と言っていたけれどもそれはいけませんよ。第五重と言わないと混乱しますから」と。いいご指導をいただいたことを思い起こしますが、もう皆さんご承知だと思いますけれども、お気を付け頂きたいと思えます。

その五重を増上寺の九世道誉上人、一〇世感誉上人の時代になりまして、略式の伝法を案出したといわれています。しかしこれは全く違うと私は考えています。その時代に相応した新しい、本当の本質を踏まえた上でその時代に合った伝法をこの時期から創設するようになったのだと思っております。それが道誉流であり、感誉流であり、あるいは幡随意流である。この光明寺にも幡随意流の伝書が二本あったのですから、やはりそれぞれの流派でそれぞれ切磋琢磨してやられたのではないかと思えます。

私は内容としてそれほど変わらないと思えます。但し、順番が変わったりします。宗脈本伝化他門伝は感誉流で言いますと五箇条です。初めに化他門伝（宗脈以上化他門伝）、二番目が都部伝、三番目が授手印伝、四番目が総口伝、五番目が凡入報土伝なのですが、これは各檀林の伝書をつぶさに見てみますと少し異なります。独自性を出したいということがあるのでしょうか。例えば小金の東漸寺の伝書を見ますと、第一が都部伝、第二が宗脈以上化他門伝となっており、そこにはカッコ書きをして、その中で縁山ではこれが逆だとなっております。なるほど、やはり何か

特徴と言いますか、そういうものが伝法の場でも結構あったのではないかと思います。

そうした中で先程、勢誉愚底の話が出ましたけれども、愚底が大樹寺において在家を対象にした五重相伝と称する伝法を創案されまして、これを相伝するようになった。これが結縁五重、化他五重です。

現在の浄土宗伝法は以上ようになっております。聖問上人の伝法は後に大五重と呼ばれます。今でも大五重が上なのか、璽書が上なのか、そういう論議がされることがありますけれども、基本的にこの大五重のエッセンスを取って出来たのが簡条伝法です。そして璽書というのはこれとは別出して三簡条が加わります。名号伝、文章伝、残紙伝（白紙伝）です。この三簡条を付け加えて、宗門の伝法の最高峰に位置付けている、これが璽書伝授道場です。

『浄土伝灯輯要』という伝法関係の書物があります。貴重な伝書を集め、大正十年に今岡達音先生その他のの方々によって出版されました。このうち結縁五重を詳述している順阿隆円の『浄業信法訣』を、ちょうど私が浄土宗布教師会の理事長をさせていただいた時、長谷川所長や、野村先生、糸原先生、そして林田先生のお力添えを得まして出版しました。これは非常に貴重なものだったのです。そういったものを基盤にして浄土宗伝法はいつでも、どこにいても基本を押さえながら、そして、一般の方々と乖離しない内容として、新しいものにチャレンジをしていく。

先代の宮林大僧正は伝弘ということをよくおっしゃった。これは『決疑鈔』に「懋ひに以て之を書す。號して選択伝弘決疑鈔と曰う」とおっしゃっております。そして「伝は先師に伝ふるなり。弘は遺弟に弘むるなり」となっております。ですから「伝弘」というのは、しっかりと「唯授一人」、一対一で、命がけで相伝を受けたこの大切な尊いお念仏の教えを、今度は遺弟、さらに拡大して一般の大衆にそれを伝えていかなければならないと、そういう使命を我々は持っているわけです。

伝法というのは、私の勸誡を聞いていただいた方にはお伝えしたと思うのですけれども、狭く言えば今我々が考えている伝法です。広義で広く考えますと、これは相伝というよりも伝道です。そういうような意味合いで、伝道は師弟が、その時と所を定めて、そしてきちんとした形ではございませぬけれども、宗祖二祖三祖の付属をいただ

いた尊い本願称名のお念仏の教えを広めていく、その第一線に立っていらつしやるのが今日お出でいただいた皆様方であろうかと思えます。

もう私も学問を離れて大分経ちますし、ろくなことをお話出来ませんでした。どうか意のあるところをお汲み取りいただきまして、特に記主禪師良忠上人の実に該博な学問を背景とした研究所設立に際しまして、あらためて本願称名の二祖三代の尊いお念仏の伝弘をしていただくことを心から切にお願いを申し上げます。締めくくりとさせていただきます。

(自信偈、同称十念にて閉会)



# 大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本について（一）

## ―模本流伝の経緯とその背景―

大 谷 慈 通

### 一、はじめに

浄土宗大本山光明寺が所蔵する、国宝『当麻曼陀羅縁起』（以下『国宝本』）は、奈良当麻寺が所蔵する「当麻曼陀羅図」の由来を描いた絵巻で、鎌倉時代絵巻の優品である。この『国宝本』には現在まで東京国立博物館蔵本、当麻寺奥院蔵本、M氏蔵本、以上三本の模本が紹介されてきた<sup>①</sup>。しかしながら、近年光明寺が所蔵することとなった模本（以下『光明寺本』）を徳川美術館の吉川美穂氏が紹介し<sup>②</sup>、また徳川美術館の特別展で展示し、江戸後期の絵師で復古大和絵の祖と称される田中訥言の筆によるもので、これまでの三本の模本に比べても美術的・歴史的価値があることが指摘された<sup>③</sup>。本稿ではこの『光明寺本』をとりあげ『国宝本』、また他の模本との比較を通じ、模本流伝の経緯とその背景を考察する。そして本稿につづく「大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本について（二）―三種の模本との比較を中心に―」では『国宝本』と諸模本との絵や詞書を比較し、『光明寺本』の価値を検討する。

### 二、『国宝本』の光明寺施入と修復時期

光明寺は日向延岡藩内藤家の菩提寺として知られているが、内藤家はもとは陸奥国磐城平藩の藩主であった。「内藤忠興寄進状」によれば、光明寺へは磐城平藩二代当主内藤忠興（延岡藩内藤家宗家初代）が当初知行一五〇石を寄付していたが、万治二年（一六五九）に五〇石を増益し二〇〇石の寄進をしている。また忠興の嫡男内藤義概<sup>よしむね</sup>は、

それまで江戸深川靈巖寺にあった内藤家の位牌堂ならびに石塔を光明寺に移築し、併せて光明寺を檀那寺とすることを申し出ている。

従来、光明寺では『国宝本』はこの義概によつて延宝三年（一六七五）に施入されたとしているが、小松茂美氏は箱蓋裏書きの内容から、以前より光明寺が所蔵していた『国宝本』を一覧した義概が損傷著しいので修理代を寄進したと解釈できると指摘している。<sup>4)</sup>

確かに、光明寺には重文「当麻曼陀羅図」が所蔵されており、これは鎌倉初期、法然門下西山派祖証空の提唱により盛んに制作された当麻寺の「当麻曼陀羅図」の転写本の一つであるうえ、類品中の優れた作例といわれている。この転写本とその縁起である『国宝本』を共に光明寺が古くから所蔵されていたとみることもできるのではなからうか。

『国宝本』の箱蓋裏書きには次のような記述がある。

相州鎌倉天照山光明寺珍蔵当麻曼陀羅縁起二卷

伝前摂政太政大臣藤原良経公後京極殿真翰 図 画工土佐将監筆

延宝三之秋 大檀越内藤左京亮従五位下義概披誦之次更加脩飾令

寄付畢

現住四拾六世貴誉万量天爾

この修復の際に狩野永真安信（一六一四～一六八五）の見立てで、絵は土佐の古将監（土佐光信）（一四六九～一五二三）、詞書は藤原（九条）良経（九条兼実の二男）（一一六九～一二〇六）という跋（奥書）が付くことになる。

さらに近年では昭和四六～四七年に国庫による修復が行われている。

また『国宝本』には次のような松平定信の添状がある。

この曼陀羅縁起は住吉法眼慶恩か筆なり筆力顕然として疑ふへからず

まいて住吉家の古記に慶恩か曼陀羅縁起を系かきしことしるし有をや

抑慶恩は元暦建久のころ撰津国すみよしの絵所なりされはこそ詞書せられし

後京極殿下と代もあひかなふへけれしかるに永真の証侍るはいかゝあらむ

よてこのことをあきらかにしらしめむかため寛政五年十月九日

左少将源定信かいつけ侍るなり（花押）

この添状は寛政五年（一七九三）に松平定信が『国宝本』の見立てを行ったものである。ここで定信は、絵師を土佐の古将監（土佐光信）ではなく、鎌倉時代の絵師、住吉法眼慶恩（住吉慶忍が読み間違つて慶恩とされていた）であり、そのほうが詞書の藤原良経と時代が合うとしている。このことから窺えるとおり、『国宝本』の制作年代、絵師、詞書の筆者を示すものがなく、次のように今日に至るまで一三世紀中頃以降の作であるとみられている。

すなわち小松茂美氏は制作時期に関して、奈良当麻寺が大曼荼羅堂修理工事を行った仁治二年（一二四二）から寛元元年（一二四三）頃と適合するのではないかと推測している。この修理に際し「当麻曼陀羅図」を掛ける厨子の扉には修理結縁衆二一五〇余の歴名が列記されているが、その中でも重要な名に鎌倉幕府四代将軍藤原頼経があり、またその補佐役である執権北条経時（光明寺開基と伝えられる）の名が記されている。小松氏は修理事業に際し、将軍頼綱が『国宝本』制作の企画をしたのではないかとする。この推測によれば執権経時と光明寺の関係、また『国宝本』が光明寺所蔵になった経緯の手がかりとなり得るのではないか。今後の研究課題の一つとしたい。

### 三、諸模本の制作時期と特徴

次に、既で紹介されている模本を河原由雄氏が比較しているので、模本『光明寺本』との関係を探りたい。

A、東京国立博物館蔵 模本 二巻（以下『東博本』）

年代を示すものはないが、各画面の端に、模写を担当した絵師の名が記されている。



i 晴川院(狩野養信)・・・寛政八年(二七九六)〜弘化三年(二八四六)

ii 勝川雅信(狩野雅信)・・・文政六年(一八二三)〜明治二年(一八七九)

養信の子。 木挽町狩野家十代目当主

iii (今村) 勝溪雅紹・・・晴川院門下

iv (山内) 嘉津五郎・・・晴川院門下

晴川院(狩野養信)は江戸幕府奥絵師の一家、木挽町狩野家の九代目当主である。伊川院栄信の嫡子であり、通称庄三郎、号ははじめ玉川のちに晴川院・会心斎と称した。奥絵師は御用絵師の格式の一つで、若年寄支配下に置かれ、御目見以上(旗本格)で二〇〇石二〇人扶持が与えられていた。

奥絵師狩野家は、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、中橋狩野家、浜町狩野家の四家がある。晴川院が当主である木挽町狩野家は当初竹川町に屋敷を拝領したことから竹川町狩野家と称していたが、六代目栄川院典信が八代將軍吉宗に才能を認められ、九代將軍家治の寵愛をうけることにより、竹川町の屋敷はそのままに、新たに木挽町に八三八坪もの屋敷地を拝領するに至り、以降木挽町狩野家と呼ばれることになる。

因みに、松平定信は一三歳の時、明和七年(一七七〇)から栄川院に絵を学んで<sup>7)</sup>いる。この頃からの縁か、晴川院も定信とは親交があり、絵巻の模写に精力的であった晴川院は多くの絵巻を定信から借用している<sup>8)</sup>。

晴川院が模写活動を盛んに行った理由の一つに文政一二年(一八二九)におこった火災によって、木挽町絵所が類焼し、伝来の模本が多数消失したことがあげられる。天保二年(一八三二)、晴川院は幕府より寺社奉行を通じて全国の各寺社が所蔵する宝物を取り寄せることのできる特別な配慮を得ることに成功している。さらに天保一年(一八四〇)と同一四年に門人数名を西国に派遣し、京都、奈良の個人、寺社が所有する宝物を模写させている。またこの年、四八歳になった晴川院は、病氣療養のために伊豆熱海へ湯治の往還の際に、伊豆三嶋大社や鎌倉鶴岡八幡宮、円覚寺、藤沢清浄光寺などの寺社に立ち寄り宝物を模写している<sup>9)</sup>。

この『東博本』がどの時点での模写かは断定できないが、以上の事柄や各絵師の活躍年代から考察すると、天保年間（一八三〇～四四）の制作と推測できる。

B、当麻寺奥院蔵 模本 二卷（以下『奥院本』）

『奥院本』の付属文書には以下のもがある。

i 寛政五年（一七九三） 松平定信添状（『国宝本』添状の写し）

ii 文化七年（一八一〇） 光明寺八〇世（増上寺五六世） 教誉典海添状（縁起の由緒）

iii 嘉永二年（一八四九） 光明寺九二世（増上寺六六世） 冠誉慧巖添状（当麻寺へ寄進）

iv 嘉永三年（一八五〇） 知恩院七一世万誉顕道添状

制作に携わった人物は不明である。制作時期に関しては、寛政五年の定信添状の写しと文化七年の添状があるの  
で、この間に制作され、その後、嘉永二年に光明寺から当麻寺に寄進されたと考えられる。

C、M氏蔵 模本 一卷（以下『M氏本』）

制作者、制作時期を示すものはなく、絵は上巻に該当する絵の部分写しである。原本より縮小されていて、順序  
が他の模本と異なり、色名の注記がある。昭和五二年に、白畑よし氏が『新修日本絵巻物全集』月報一二で初めて  
紹介した<sup>10</sup>。

#### 四、大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本（『光明寺本』）の制作時

次に『光明寺本』であるが、これには箱蓋裏に次のような貼札墨書がある。

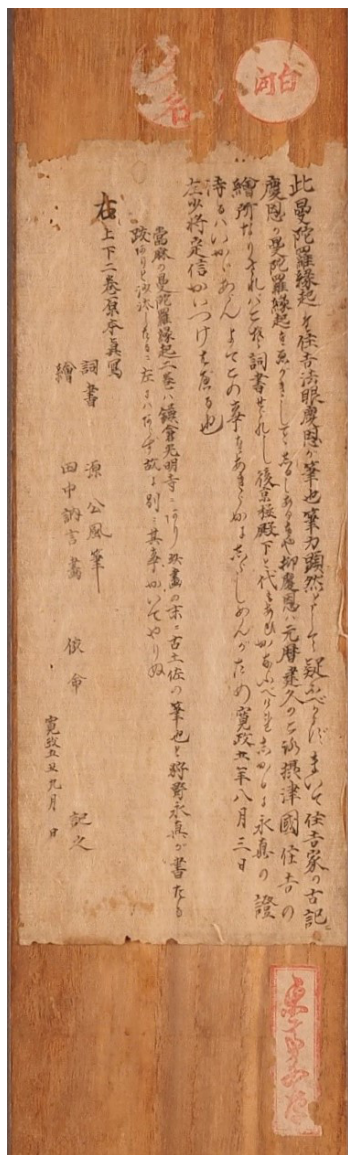


写真 1

前半は『国宝本』の松平定信添状の内容が記されている。『国宝本』添状の内容と異なる点は、日付が寛政五年十月九日とあるのに対し、寛政五年八月三日と約二ヶ月早い日付となっている。

また定信添状の写しに続いて次の記載がある。

當麻の曼陀羅縁起二巻は鎌倉光明寺にあり此画の末に古土佐の筆なりと狩野永真が書きたる

跋ありと沙汰したるにさにはあらず故に別に其事かいてやりぬ

なお、この二行の文は、定信の自著『退閑雜記』にも記されていることから、定信の言葉であるとみられる。さらにこの模本を担当した人物として次のように記されている。

右 上下二巻原本真寫

詞書 源公風筆

繪 田中訥言 画 依命

寛政五丑九月 日

記之

〔源（森）公風〕

詞書を担当したと記されている森公風に関して詳細は詳らかではないが、幕府右筆森尹祥もりまさよし（一七四〇～一七九八）の二男とみられる。森尹祥は持明院流の書家であり、松平定信との関係が深く、『松平定信旧蔵書入木道書一式』の中には、尹祥の著作とされる『賢聖障子薰仲舒賈誼小伝並に書論』『詩歌書法』『武家懷紙瑞造之事』『行幸詩歌御会拔書』『懷紙書法』があり、これらは定信のために作成したものと推定される。寛政五年一月には持明院家に誓詞を提出し、正式に入門をしている。<sup>12</sup>『退閑雜記』には尹祥が定信の命で「後三年合戦絵巻」の詞書（13）に関して鑑定を行ったことが寛政五年一月三日の日付で記されている。

また国学者、屋代弘賢は尹祥に書を師事、定信に認められ幕府右筆になっている。このような関係から公風が詞書の担当になったのであろう。

〔田中訥言たなかとつげん〕

田中訥言は尾張名古屋の生まれで、京都に住した。田中寿庵という医師の息子である。落款にみえる号は、訥言、癡翁、虎頭、晦存、求明などがある。このほか、大孝齋、過不及子、得中があるという。幼い時に日蓮宗に入門し、のちに比叡山延暦寺の僧となったが還俗した。はじめ狩野探幽（一六〇二～一六七四）の流れを汲む鶴澤派の石田幽汀（一七二一～一七八六）に師事し、円山応挙（一七三三～一七九五）や原在中（一七五〇～一八三七）と同門であった。その後、師に先立たれたため、土佐光貞（一七三八～一八〇六）の門に入る。天明八年（一七八八）二二歳で法橋に叙せられる。文化三年（一八〇六）には再び師に先立たれたため、二五歳の光孚（一七八〇～一八五二）の後見人となる。文化一〇年代に名古屋に在って、画業に専念して数多くの作品を描き、その間京都へも頻々足を運んだ。文政元年（一八一八）五二歳の時に京都に帰り、染色や色襲を研究した『色のちくさ』を上梓している。文政以後、患っていたとされる眼病の悪化で文政六年（一八二三）、五七歳で生涯を終える。訥言の最期は、

失明したことに絶望し、自ら舌を嚙んで絶命したと長らく伝えられていたが、現在それには否定的な見解が多い。<sup>14)</sup>



写真 2



写真 3

箱裏には朱丸印二種と重郭朱長印一種の蔵書印が貼り付けられている。写真2の右側の「白河」と読める朱丸印は、定信が藩主を勤めていた白河藩を表す印であり、左側は摩耗してはいるが「桑名」と判読できる。これは松平家が文政六年に白河藩から桑名藩へ移封した後の印である。また写真3の重郭朱長印は「楽亭文庫」と記されている。これは定信自筆の蔵書印である。文化九年（一八一二）五五歳で隠居した定信は、楽隠居という意味で楽翁と自称し、別荘を共楽亭と呼んだ。同じような由来で自らの蔵書関係を楽亭文庫と名付けた。文政五年には蔵書二万五千巻を超えて、質量共に江戸時代屈指のコレクションであったが、現在は散逸している。書誌学者長沢規矩也の説によれば、明治初年に旧藩家老がこの文庫を船で桑名から東京に運ぶ途中に難破してしまったと詐称し、勝手に売却したとある。<sup>15)</sup>

この蔵書印が示すとおり、『光明寺本』は定信のコレクションとして明治までは松平家が所蔵していたと考えられる。

## 五、大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本（『光明寺本』）の制作背景

—寛政期から始まる復古の流れと定信の好古趣味と収集—

江戸時代中期から後期は、幕藩体制が弱体化し、幕府の権威が墮ちる中、財政危機、飢饉、一揆、西欧列強諸国の東洋進出といった外圧などにより、社会全体が不穏な空気に包まれ始めた時期である。このような情勢になると返って根源的なものに戻ろうとする流れが起こり、復古の思潮が国学を發展させる流れが生まれる。この流れは幕末の尊皇攘夷思想の広まりへと続いていくことになる。

天明八年（一七八八）正月、内裏が火災により焼失した。ときの天皇は先帝後桃園天皇には皇子がいなかったため閑院宮典仁親王の第六皇子であったが皇位を継いでいた。この光格天皇は強い皇統意識を抱き、日本国の君主という意識も強く、朝廷の権威を高めるため、有職故実を学び、朝廷の儀式・祭礼の復興を進めたとされる。

この火災による内裏再建の幕府側の総責任者、造営総督を務めたのが松平定信である。定信はこの前年、天明七年六月一九日に三〇歳という若さで無役から老中、それも首座に任命され、翌年三月四日には將軍補佐を拝命する。その就任間もない三月二二日に、従来は京都所司代や伏見奉行が任命されていた御所の造営総督を自ら引き受けている。

幕府としては、財政難や飢饉などから造営に際しては経費の削減を目指し、ひとまず仮普請を行って天皇を居住させ、そのあと徐々に消失前と同じものを造ろうとしたとされるが、光格天皇の有職故実に対する強い思いが、内裏の再建は復古様式でと望まれたのである。朝廷側は幕府へ、公家の裏松光世（固禪）が作成した『大内裏図考証』にもとづき、紫宸殿と清涼殿を平安時代の様式とし、規模も拡大することを強く求めてきた。そこで定信は老中として新任の京都所司代の引き継ぎのために上京することになっていたが御所造営の交渉や遠国の視察などを真的目的としていた。<sup>16)</sup>

五月九日に江戸を出発して中山道を通り京都に向かっている。この一行には絵師を同行させ、途中の寺社などにある古物を写させたり風景を描かせたりしつつ、二二日に入京している<sup>17</sup>。定信は自著『宇下人言』に

予は古き文書又は画図・古画・古額などうつしをくをたのしむ。此事多き旅行なれど道すがら寺院などの什物取り寄せ、夜などもうつし止めて行きぬ<sup>18</sup>。

と自ら記すほど古書画の収集に力を注いでいる。

そして二五日に内裏造営について関白鷹司輔平と協議している。定信は当初費用がかさむので復古様式での造営には難色を示したが、結果的には復古様式が採用され規模も拡大されることになった。

定信は復古様式で造営するため禁裏絵師の土佐光貞に指揮を任命している。『大内裏図考証』では不明な点が多く、光貞は企画当初から古図の収集を命じられ、絵図の収集、書き直し、復古に対する提言なども行った。幕府は出費の節減のために絵師を江戸から派遣するのではなく、京都で町絵師を雇っている。この絵師の中に光貞の門下として参加した田中訥言がいる。訥言は常御殿の南廂東方の杉戸に「海棠瑠璃鳥」「木芙蓉翡翠」を描いている<sup>19</sup>。

しかし大内裏の正殿である紫宸殿の賢聖障子のみは、慣例により江戸の奥絵師に担当させた。賢聖障子とは母屋と北廂をへだてる障子で、九枚中、東の四枚と西の四枚に中国三代から唐代までの賢人・聖人三二名図像を描き、この図柄を伝統としている。ここで抜擢されたのは、定信が幼少の頃、絵を学んだ木挽町狩野家栄川院であった。栄川院は下絵を描き上げたが、寛政二年八月に六一歳をもって病死してしまう。そこで定信は後任を住吉派の住吉広行に命じている<sup>20</sup>。

鎌田純子氏によると、下絵には寛政二、三、四年の三本があり、最初の栄川院の下絵は寛政の三博士の一人であり定信から検証を託されていた柴野栗山の見たてでは、賢人の冠・衣服などに不満があった。そこで栗山と住吉広行で検証を重ねて二本目ができ、さらに文章博士と栗山との論議考証により、三本目の下絵ができあがったとされる<sup>21</sup>。住吉広行は賢聖障子を江戸で完成させ、寛政四年九月に京都へ送った。御所の造営は寛政元年二月に始まり、翌二

年八月には完成し、光格天皇は一月には仮住まいであった聖護院から新しい御所に移っている。

したがって、この賢聖障子以外はほとんどができあがっていたとおもわれ、時間をかけて考証し完成させたこの賢聖障子の重要性をあらわしている。

寛政四年一〇月、柴野栗山、住吉広行、屋代弘賢は御所の賢聖障子の視察に京都に向かっているが、同時に行は定信の命により京都近在の諸社寺の什物調査も目的としている。この調査には京都の有職故実研究家、藤貞幹（一七三二—一七七）の助力を得ているが、ここに田中訥言が加わっている。

藤貞幹は内裏造宮の参考とされた裏松光世『大内裏図考証』にも協力した好古家で、日本の古代史に関心が深く、古文書・金石文・器物・書画の調査に各地を歩き、寛政七年に『好古小録』、同九年に『好古日録』を刊行しているが、両書の挿絵を担当したのが訥言であった。<sup>22)</sup>

天明から寛政にかけて、ロシアをはじめとする、列強諸国の船が貿易を求めて各地に寄港したり、周辺を航行するようにになっていた。幕府は寛政三年九月二日に各大名に対して、異国船が漂流している際には、船員を上陸させ、たうで幕府に処置をうかがう。もし先方が抵抗すれば、大筒などにより打ち払い、隣領とも協力して対処するように通達している。

こうしたなかで、寛政四年九月三日にロシア使節ラクスマンが、漂流民の大黒屋光太夫らの送還とともに、貿易の許可を求める国書を携えて根室に來航する。そして、江戸への回航を求めてきたため、一〇月一九日に松前藩は幕府に報告している。そこで、定信は自ら作成していた「海辺御備愚意」を老中の評議を経て、將軍に提出している。それをうけ、一月一七日に定信は將軍より海辺御備向御用掛に任命された。

そして翌寛政五年三月一八日から四月七日まで二〇日あまり海防の視察のため、定信自ら勘定奉行や目付を従えて相模と伊豆沿岸に赴いている。この視察団には地形を絵によって記録させるために、田安家の家臣で奥詰見習を勤めていた絵師の谷文晁を随行させている。帰国後、文晁は洋画の技法を応用して「公余探勝図」を完成させた。



おそらく、この海防視察の行程の折、光明寺に立ち寄り、『国宝本』を目にし、模本を作成させたとみられる。定信は前述の通り『光明寺本』の箱裏貼付墨書には寛政五年八月三日の日付で鑑定している。因みにこの日は定信が老中と將軍補佐役を依願辞任の形で解任され、少将（正確には左近衛権少将）に昇進した直後である。また「国宝本」添状には一〇月九日となっている。訥言は寛政五年九月に模写を完成させたことを記していることから、海防視察から戻った定信は、八月三日以前に光明寺より「国宝本」を借り受け、訥言と公風に模写させ、一〇月九日には極書を清書して「国宝本」に添えて返却したのではなからうか。<sup>23</sup>

この時の模写を京都在住であるはずの訥言に命じた理由は不明だが、前述の寛政四年の柴野栗山、住吉広行、屋代弘賢らの什物調査に参加していた訥言の模写技法の確かさを、定信に報告していた可能性は高い。老中を解任された定信は翌寛政六年白河への帰藩を許された。その後の定信は更に古画、古書、古物の収集・調査に力を注いでいる。

寛政八年六月、文晁は定信の命により什物調査のために西遊している。文晁に同伴したのは、当時昌平坂学問所で学んでいた白河藩の儒者広瀬蒙斎と文晁の弟子喜多武清であった。この調査の六月二四日には、田中訥言らと高山寺で「鳥獣戯画」を模写している。<sup>24</sup>

これらの調査の集大成として寛政一二年に『集古十種』が版本として刊行された。十種とは碑銘・鐘銘・兵器・銅器・楽器・文房・印章・扁額・書・画であり、全八五巻からなる。定信と訥言の関係は、その後も断続的にあつたようである。平等院鳳凰堂扉絵の原寸模本（東京国立博物館蔵）の箱書に「文化年中奥州白川城主松平越中守殿依御所望画師田中訥言写之」とあり、文化年間にも定信の命により模写を請け負ったことがわかる。<sup>25</sup>

以上のように『光明寺本』の制作背景には、復古の時代背景のなか定信の好古趣味もあり、内裏造営を機に多くの学者、絵師たちの交流が生まれたことによることがわかる。

## 六、まとめ―諸模本との関係―

田中訥言の特徴の一つには、現状の破損や汚れをそのまま写す「剥落写し」という技法がある。これは訥言が始めたと思われるもので、『光明寺本』はまさにこの「剥落写し」で模写されているので、寛政五年当時の『国宝本』の姿の基準になると考えられ、貴重な資料と言える。

また訥言の作品で年代の明確になっているものもつとも初期のものは、寛政六年（一七九四）の「三十六歌仙絵巻」の模写とされているので、『光明寺本』の存在が確認されたことよって一年遡れることになった。

『東博本』は『光明寺本』と比較すると、構成は同じであるが模写担当者の署名が入り、また完全なる「剥落写し」ではなく、絵の枠線は残り、汚れの写しは少なく、多少加色をしている。そしておおよそ天保年間（一八三〇～四四）の制作と推測され、『光明寺本』より年代が下ると思われる。

『奥院本』は加色をした修復模写であり、構成は『光明寺本』『東博本』と同じである。『国宝本』と同様の寛政五年と記された定信添状の写しが付属し、文化七年（一八一〇）の添状があるので、この間の制作と見ることができるとする。

今回確認作業は行っていないが、『M氏本』は上巻にあたる絵だけを部分的に写したものであり、また色名の注記があるので、模本の下絵とも考えられる。

『国宝本』を所蔵する光明寺が、美術的・資料的価値の高い『光明寺本』を所蔵できたことは、大変意義深いものであり、今後の『国宝本』研究に大きな役割を果たすものと期待される。

そこで続いて「大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本について（二）―三種の模本との比較を中心に―」において『国宝本』と諸模本との絵や詞書を比較し、『光明寺本』の価値を検討する。

- (1) 河原由雄「当麻曼荼羅縁起の成立とその周辺」(『日本絵巻大成』二四、中央公論社、一九七九) 一〇一—一〇三頁  
また調査の過程で神居文彰氏より宇治平等院に「模本」を取蔵しているとの報をうけた。今後の研究課題としたい。
- (2) 吉川美穂「田中訥言の古画研究—松平定信との関わりを中心に—」(『鹿島美術研究』三〇別冊、二〇一三)
- (3) 徳川美術館「復古やまと絵 新たな王朝美の世界—訥言・一蕙・為恭・清—」(二〇一四、秋季特別展図録)
- (4) 小松茂美「当麻曼陀羅縁起 稚児観音縁起」解説(『続日本の絵巻』二〇、中央公論社、一九九二) 七八—七九頁
- (5) 注(4) 文献七九—八七頁
- (6) 注(1) 文献
- (7) 磯崎康彦『松平定信の生涯と芸術』(ゆまに書房、二〇一〇) 二七頁
- (8) 岩崎清美「日光社参における奥絵師の役割—狩野晴川院養信「公用日記」・「日光御参詣供奉雜記」を中心に—」(『交通史研究』五三、二〇〇三) 五五頁
- (9) 安藤香織「狩野晴川院養信による寺社宝物模本の基礎的研究」(『科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 研究成果報告書』課題番号二三七二〇〇六、二〇一三)
- (10) 白畑よし「当麻曼荼羅縁起」の模本について『新修日本絵巻物全集』月報二二、角川書店、一九七七) 七—八頁
- (11) 松平定信『退閑雜記』(鈴木正之助発行、一八九二) 八一—九頁
- (12) 一戸渉「近世入木道書の生成と伝播: センチュリー文化財団蔵『松平定信旧藏入木道書一式』『弘法大師書流系図』とその周辺」(『斯道文庫論集』四九、二〇一四)
- (13) 注(11) 文献一四—一七頁
- (14) 日並綾乃「近世の土佐派と復古大和絵—「復古大和絵」の定義の問題」(『東アジア文化交渉研究』七、二〇一四) 一四九頁
- (15) 菅野俊之「松平定信の蔵書印」(『福島教育』八三、一九八三) 四〇頁
- (16) 高澤憲治『松平定信』(吉川弘文館、二〇二二) 一一三—一一五頁
- (17) 注(16) 文献一五九頁
- (18) 松平定信『宇下人言』(岩波書店、一九四二) 八〇頁
- (19) 注(14) 文献一五〇頁
- (20) 注(7) 文献二二八—二二九頁

- (21) 鎌田純子 「寛政度御所造営における賢聖障子の製作過程について」(『鹿島美術研究』二四別冊、二〇〇七)四九二―五〇二頁
- (22) 注(2) 文献三五三―三五四頁
- (23) 注(22) 文献三五二頁
- (24) 注(7) 文献一三三頁
- (25) 注(22) 文献三五五頁
- (26) 注(14) 文献一五〇頁



# 大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本について（二）

## ―三種の模本との比較を中心に―

杉 浦 尋 徳

### 一、はじめに

本論では前稿の大谷慈通氏による「大本山光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本について（一）―模本流伝の経緯とその背景―」を受けて、光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』模本（以下、『光明寺本』）を中心に、国宝『当麻曼陀羅縁起』（以下、『国宝本』）と各種模本との比較を論じていきたい。

### 二、『当麻曼陀羅縁起』の模本比較に関する先行研究

『国宝本』と各種模本との比較に関する先行研究としては、河原由雄氏が「『当麻曼荼羅縁起』の成立とその周辺」において、東京国立博物館蔵模本（以下、『東博本』）や当麻寺奥院蔵模本（以下、『奥院本』）、M氏蔵模本（以下、『M氏本』）との対比を行っており、各種模本の構成や特徴を述べ、『国宝本』と『奥院本』を並列して掲載し、その差異を比較している。

しかし、近年、新出として紹介された『光明寺本』に関しては全く言及されていない。そこで本論では『国宝本』と『光明寺本』を中心に比較を行い、その特徴や資料的価値について述べたい。

## 三、各種模本について

『当麻曼陀羅縁起』の模本は現在四種類確認されている。そのうち『M氏本』は未見のため、『国宝本』と共にその他三種の模本を用いて対比を行いたい。四種の模本の概要とそれぞれの特徴を確認したものが左の表となる。

名称	成立年代	詞書 作者	絵師	特徴
『国宝本』	一二〇〇年代	不明	不明	絵の一部が欠落・錯簡
『光明寺本』	一七九三年	源公風	田中訥言	『国宝本』に酷似している。
『東博本』	一八三〇年～ 一八四四年	不明	晴川院 勝川雅信 今村勝溪雅紹 山内嘉津五郎	絵の境に余白があり、絵師の署名が施されている。
『奥院本』	一七九三年～ 一八一〇年	不明	不明	鳥の子紙を使用。絵の色彩が他本より鮮やか。
『M氏本』 <sup>②</sup>	不明	不明	不明	上巻の図画のみを部分写している。

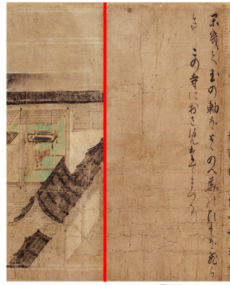
#### 四、『国宝本』と各種模本との差異

##### 1、差異がある箇所の確認

河原氏の論文では『国宝本』と『奥院本』のみの対比であるため、本節では『光明寺本』と『東博本』を加えて、改めて『国宝本』と各種模本を比較し、『国宝本』の欠落・錯簡部分を確認してみたい。欠落・錯簡部分が明確になるように紙のつなぎ目に赤線を引き、便宜上A～Gの記号を当て『国宝本』と各種模本の同じ絵に対応させた。

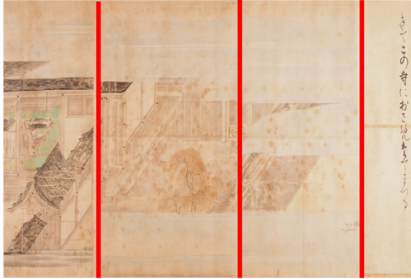
##### ① 上巻 絵 第一段

『国宝本』



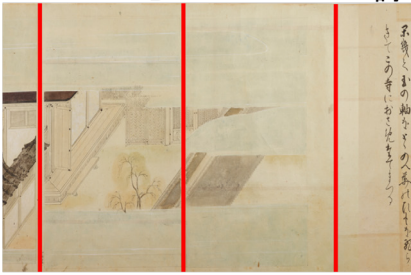
C 詞

『光明寺本』



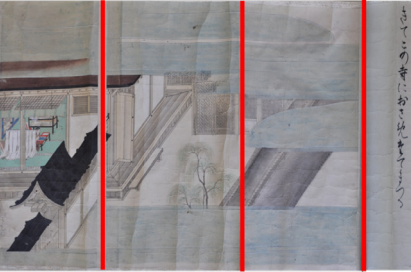
C B A 詞

『東博本』



C B A 詞

『奥院本』(以下同様)



C B A 詞



② 上巻 絵 第二段



詞 E D



詞 F D

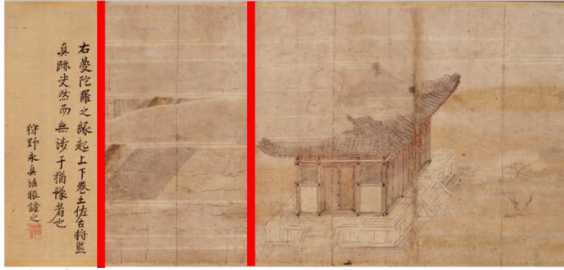


詞 F D



詞 F D

③ 上卷 絵 第三段

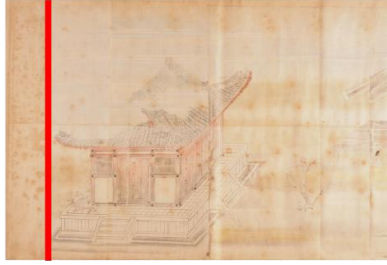


奥書

A

G

右曼陀羅之縁起上下卷と佐香特匠  
真跡史然而無涉于彌隆者也  
繪野永其法眼識之



G



G



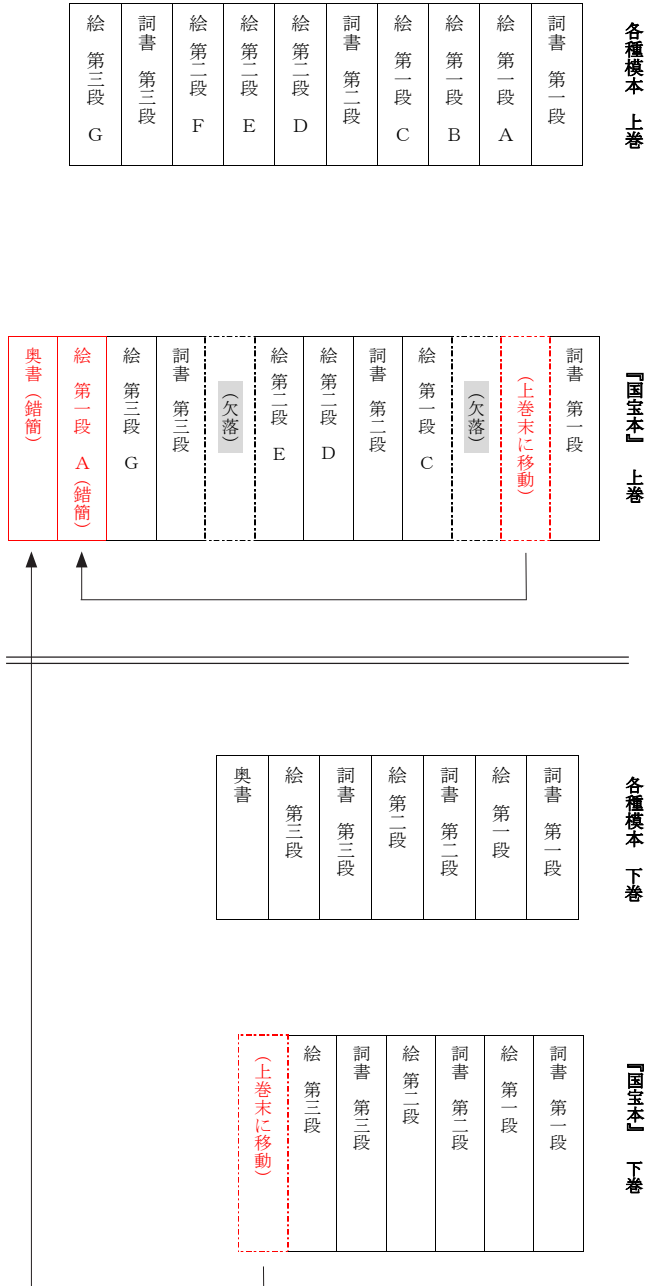
G

四書を比較すると、まず①（上巻 絵 第一段）では『国宝本』のAとBの部分が欠落していることがわかる。次に②（上巻 絵 第二段）では『国宝本』のFの部分が欠落していることがわかる。最後に③（上巻 絵 第三段）では『国宝本』の下巻末にあるはずの奥書が上巻末に移動しており、上巻第一段で欠落したと思われるAの部分が奥書と共に上巻末に移動していることがわかる。

以上、河原氏が指摘した三箇所を『光明寺本』『東博本』を含め、改めて確認した。河原氏が指摘するとおり、確かに『国宝本』と各種模本では構成が異なっているのは明らかである。

## 2、『国宝本』と各種模本の全体図

前項では差異がある箇所を局所的に取り上げ『国宝本』と各種模本の比較を行った。次に『国宝本』と各種模本の全体図を整理し、構成の差異を確認すると左の表のようになる。



河原氏は『国宝本』と『奥院本』を比較して差異の部分が複数箇所であると主張している<sup>③</sup>。そして今回の比較検討によって、河原氏の主張する差異が『奥院本』だけでなく『光明寺本』『東博本』にも同様にみられることが確認された。『国宝本』の欠落・錯簡が他の模本には見られないことから、『光明寺本』『東博本』が製作された寛政五年（一七九三年）の時点では『国宝本』は各種模本と同じ構成をしていたはずであり、何らかの原因で絵の一部が欠落・錯簡してしまったと考えるのが自然である。

さらに河原氏が論文に掲載した『国宝本』の画像データにはBとFの部分は欠落しているものの、Aと奥書の錯簡がなされていない<sup>④</sup>。このことから、河原氏が画像データを入手した後に、『国宝本』のAと奥書を錯簡してしまった可能性が高いといえよう。

## 五、各種模本の模写の精度について

『光明寺本』と『奥院本』、『東博本』は、『国宝本』を正確に模写していることは間違いなく、三種模本を比較したところ詞書の誤字脱字や絵の登場人物や建物の位置関係など、明確な差異は見られなかった。しかし、模写の精度を比較すると、『光明寺本』・『東博本』と『奥院本』では明らかに精度が異なることがわかった。

『光明寺本』の絵師は田中訥言、『東博本』の絵師は晴川院と他三名であり、共に江戸時代末期の復古大和絵と深く関係する人物である。『光明寺本』『東博本』に用いられている「剥落写し」という技法について日並彩乃氏は「近世の土佐派と復古大和絵―「復古大和絵」の定義の問題」において、

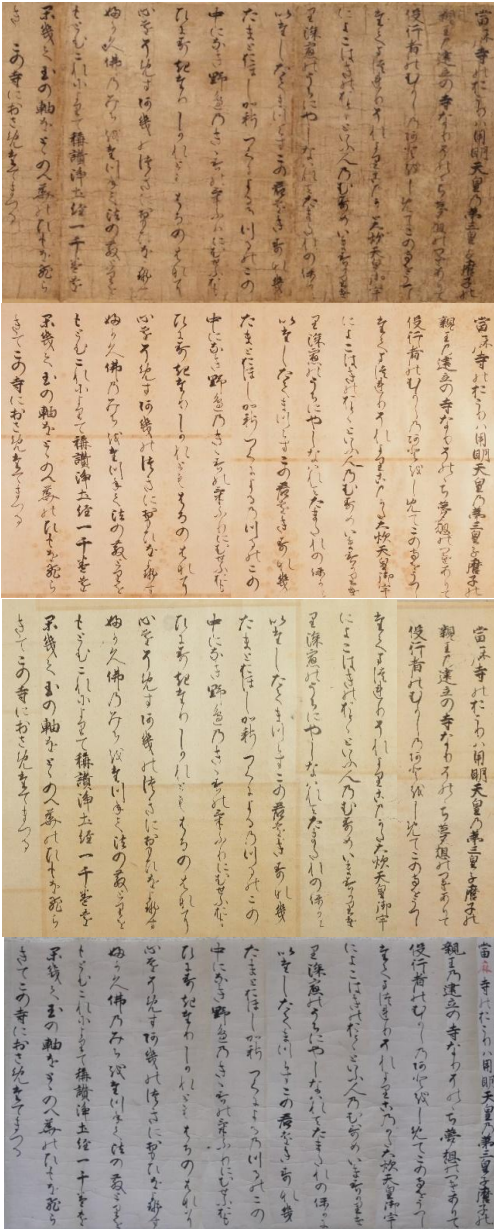
当時、古画は作品というよりも歴史的資料としての認識が強く、膨大な模写を通じて正確な歴史を読み取るこ  
とが目的であった。訥言の特徴とされる現状の破損や汚れをそのままに写す「剥落写し」という技法もこの歴  
史調査の中で使用されたと考えられる<sup>⑤</sup>。

と、田中訥言が用いた「剥落写し」の技法の特徴と必要性について述べている。

つまり『光明寺本』と『東博本』は共に「剥落写し」の技法を用いて、『国宝本』の当時の汚れやしわまでも忠実に再現している可能性が高い。そこで、『国宝本』と各種模本の詞書・絵をそれぞれ比較して、各種模本の精度の差を確認してみよう。

### 1、詞書の精度の比較

左図は四種の詞書の初めの部分である。



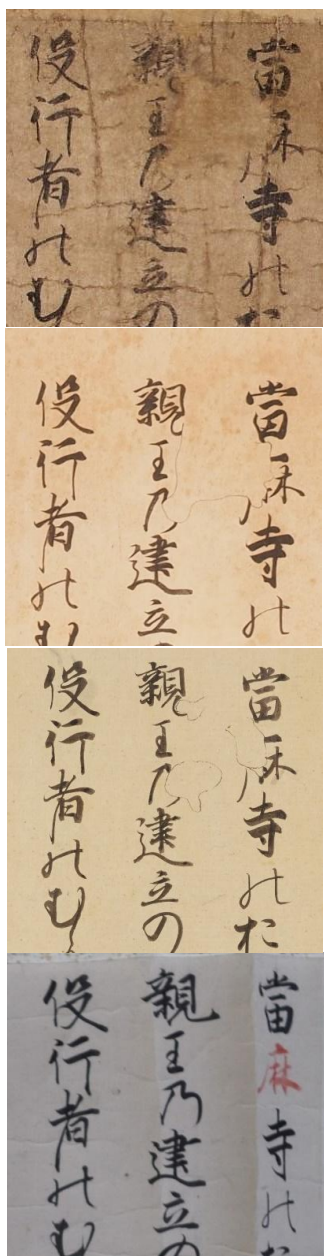
『国宝本』

『光明寺本』

『東博本』

『奥院本』(以下同様)

その冒頭部分を拡大してみよう。

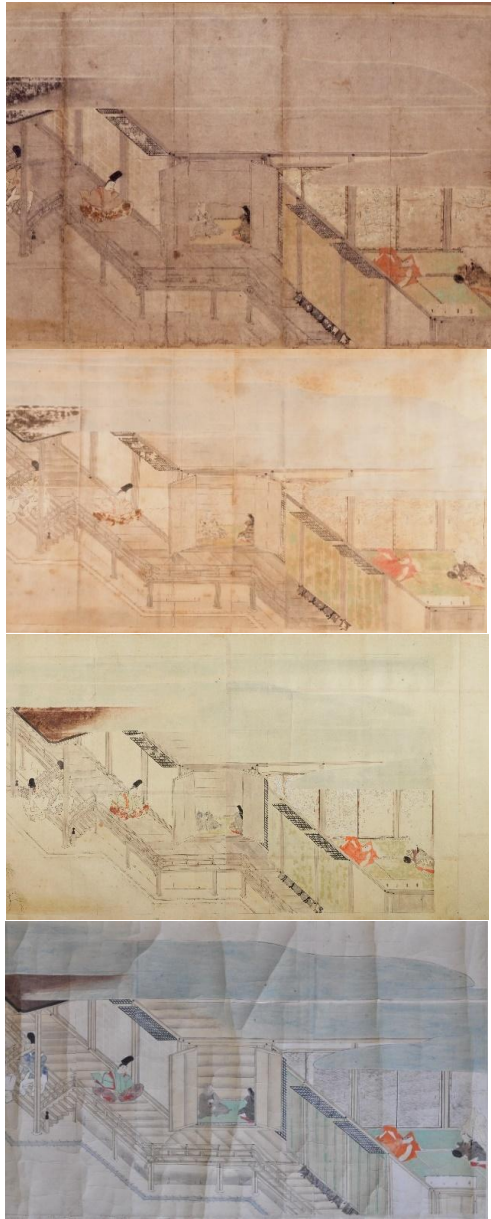


『国宝本』をよく見ると、一行目と二行目の間に剥落した部分があり、「麻」と「乃」の字が擦れているのがわかる。『奥院本』はこの二字をはっきりと書いているのに対し、『光明寺本』・『東博本』は剥落の輪郭を細い線で描き、文字の擦れている部分まで正確に再現している。

また、「當」・「寺」・「親」の字を比較すると、『奥院本』よりも『光明寺本』・『東博本』のほうが『国宝本』の字をより精密に模写している。このような字体の精度の差は拡大した部分だけでなく、詞書全体に及んでいる。

このように四種の『当麻曼陀羅縁起』模本の詞書を比較してみると、『奥院本』よりも『光明寺本』・『東博本』のほうが、より『国宝本』に似せて模写していることが分かる。

## 2、絵の精度の比較



次に上巻の絵、第二段を比較してみると、『奥院本』は『国宝本』と配色が異なる。『国宝本』には絵に折り目が二本入っており、『奥院本』にはそのような縦線は入っていないが、『光明寺本』・『東博本』には折り目と同じ部分にうっすらと縦線が入っている。つまり、『光明寺本』・『東博本』は模写した時点での折れ線や汚れまで模写しているのである。

このように『奥院本』と『光明寺本』・『東博本』は共に『国宝本』を忠実に模写していることは間違いないが、模写の手法が異なっていることは明らかである。そのことから『光明寺本』を制作した田中訥言等、及び『東博本』を制作した晴川院等は共に「剥落写し」を用いて、それぞれの模本を制作したと考えられる。対して『奥院本』は



詞書の字体が『国宝本』と異なっており、絵も『国宝本』が製作された頃の配色を想像して描かれていることから、「剥落写し」とは明確に異なっている。

## 六、『国宝本』・『光明寺本』・『東博本』の細部の比較

前節で『光明寺本』と『東博本』が剥落写しを用いて『国宝本』を精密に模写していることを確認した。では『国宝本』と二種の模本とは本当に寸分違わないのだろうか。そして『光明寺本』より後の時代に模写されたと推測される『東博本』は『国宝本』と『光明寺本』のどちらを見て模写したのだろうか。

この点について、三書の詞書を比較してみると非常に細かい部分だが差異が生じている。なぜそのような差異が生まれたのかを検証し、『東博本』の模写の底本を判明させたい。

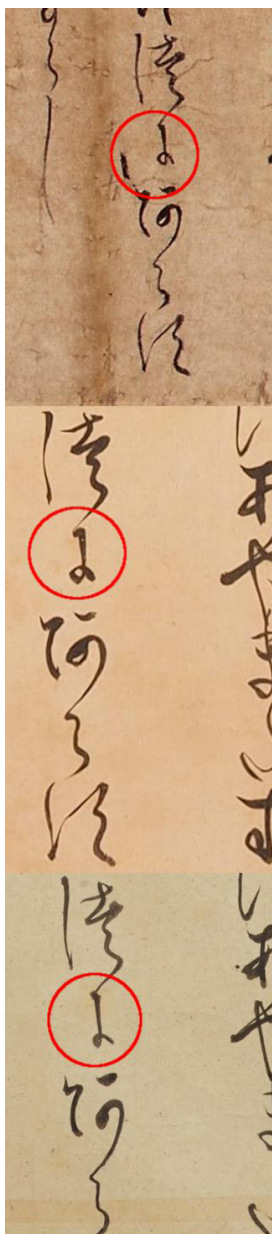
### 1、三書のうち『国宝本』のみ差異が生じている部分

#### ① 下巻 詞書 第三段 六行目

『国宝本』

『光明寺本』

『東博本』 (以下同様)



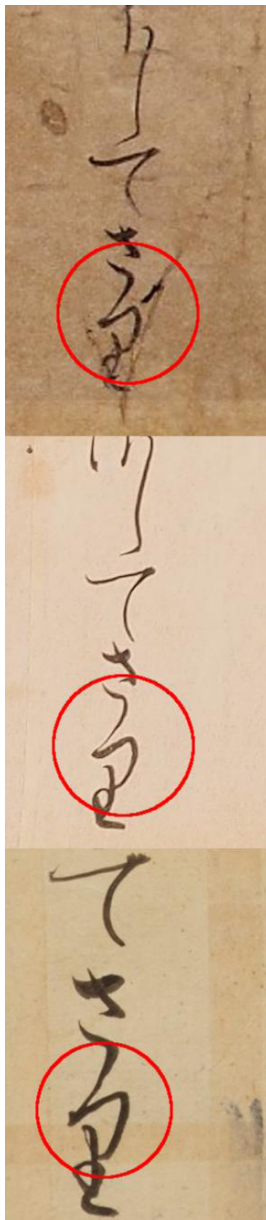
丸で囲った部分「に」の文字は、『国宝本』のみ左側に点が存在する。

② 下巻 詞書 第二段 十行目



丸で囲った部分「い」の文字は、『国宝本』のみ左側に点が存在する。

③ 下巻 詞書 第二段 一六行目

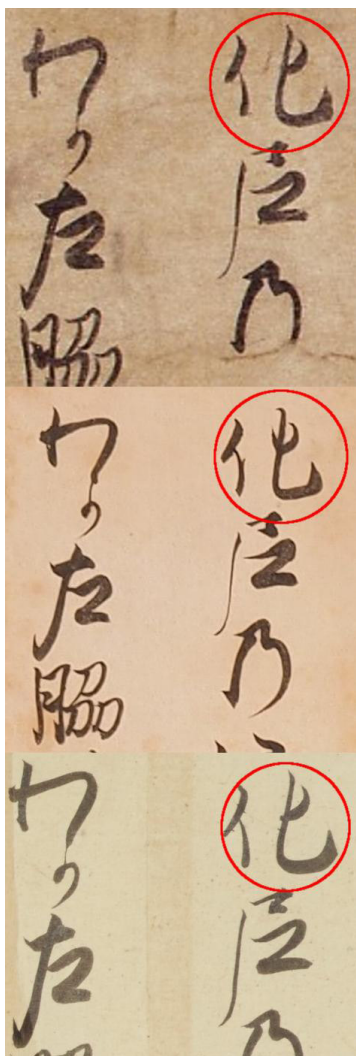


丸で囲った「る」の部分は、『国宝本』のみ右側に点が存在する。

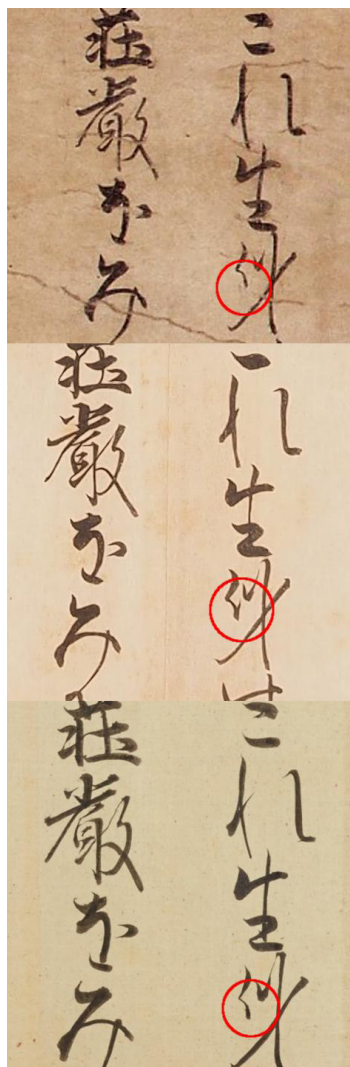
『国宝本』における文字の擦れや汚れなどは基本的に『光明寺本』や『東博本』で再現されているが、上記の三箇所は『国宝本』と『光明寺本』・『東博本』とで差異が生じている。これらの差異は、『光明寺本』と『東博本』で一致していることと、存在する点が字とは関係ない不必要な点であるから、模本が作られた後についてしまった点だと推測できる。

2、三書のうち『光明寺本』のみ差異が生じている部分

① 下巻 詞書 第二段 一五行目



丸で囲った「化」の部分は、『光明寺本』のみ、つくりの横線が突き出ている。



丸で囲った「身」の部分は、『光明寺本』のみ二画目がはねている。

また、三種の『当麻曼陀羅縁起』のうち『東博本』のみ差異が生じている部分は確認されなかった。以上のことから『東博本』は『国宝本』を見て模写した可能性が高いと考えられる。

### 七、『東博本』独自の特徵について

『光明寺本』と『東博本』は共に「剥落写し」の技法によって『国宝本』を精密に再現していることは既に確認した。さらに前節では詞書の模写に関しては『東博本』の方が僅かながら精密であることも確認した。しかし、『東博本』は詞書・絵の欄外に署名や仕切り枠など『国宝本』にはみられない部分を設けている。以下、その該当部分を確認したい。

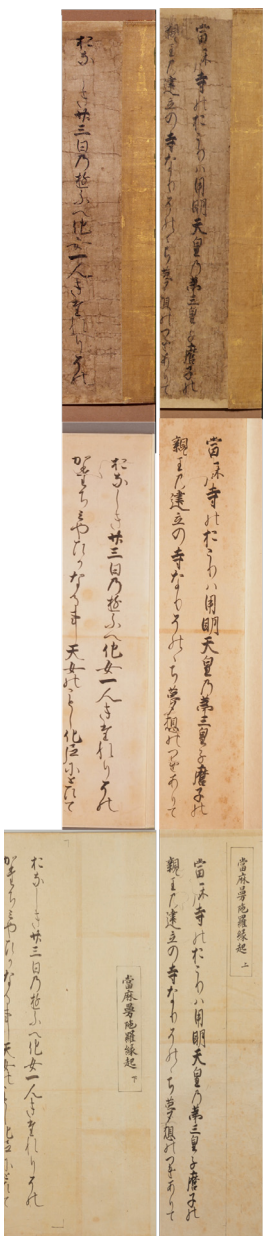
1、上・下巻 表題

左図は三書の上・下巻の冒頭部分である。(右側が上巻、左側が下巻)

『国宝本』

『光明寺本』

『東博本』(以下同様)



三書を比較すると『東博本』のみ表題が詞書の冒頭部分に表記されている。

2、絵の境目となる太い仕切り枠(上巻 絵 第二段)



三書を比較すると『東博本』のみ中心からやや左側に白い線が縦に入っているのがわかる。『東博本』は場面ごとに担当の絵師が異なっているので、こうした白線を多数確認することができ、その場面の境目に空白部分が生じているのである。絵の枠内については『国宝本』を精密に模写しているが、それぞれの境目に生じている空白部分の面積だけ『国宝本』と齟齬が生じている。

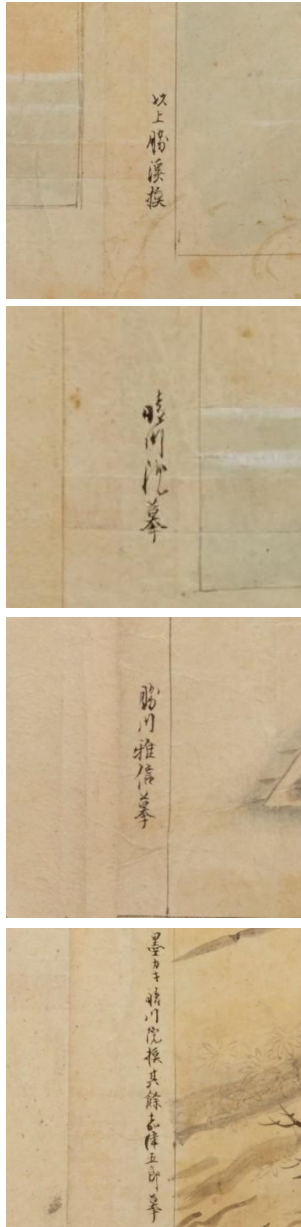
### 3、絵師の署名（全て『東博本』）

今村勝溪雅紹（上巻 絵 第一段B）

晴川院（上巻 絵 第一段C）

勝川雅信（上巻 絵 第三段G）

晴川院および山内嘉津五郎（下巻 絵 第一段）



『東博本』は他の三書と異なり、絵の場面の外側に絵師の署名が記されている。先ほど挙げた絵と絵の境目に生じている空白部分にそれぞれ担当した絵師が署名をしているのだが、本来この空白部分は存在せず、『国宝本』には存在しない署名を書きこんでいることから、「剥落写し」という観点から見ればやや厳密さに欠ける部分であると言えよう。

以上、『東博本』のみに見られる独自性を三点確認した。詞書の精密さで比較すると『光明寺本』より『東博本』

の方が僅かに上かもしれないが、全体を通しての一致率で考えれば、『東博本』より『光明寺本』のほうがはるかに高い。よって「剥落写し」の厳密さで『光明寺本』と『東博本』を比較すると、『光明寺本』の方がより忠実に『国宝本』を模写していることが明確であろう。

## 八、おわりに

本論では新出した『光明寺本』を『国宝本』や他の模本と比較した結果、以下の四点について明らかになった。

1、『光明寺本』は他の模本と同じ構造をしており、『国宝本』は絵の部分が二場面欠損および二場面錯簡している。  
2、『光明寺本』と『東博本』は剥落写し、『奥院本』は他の技法。よって『光明寺本』と『東博本』のほうがより『国宝本』に近い。

3、詞書の細部に関しては「光明寺本」と「東博本」では「東博本」のほうが僅かに精度が高い。

4、『東博本』には『国宝本』やほかの模本にはみられない部分が複数ある。

以上のことから『光明寺本』が『国宝本』を最も忠実に再現していることが確認された。「剥落写し」の技法によって模写された『光明寺本』の資料的価値は、完全な状態の『国宝本』を確認するうえで非常に高いといえよう。

(1) 河原由雄『当麻曼荼羅縁起』の成立とその周辺（『日本絵巻大成』二四、中央公論社、一九七九）一〇一〜三頁

(2) 『M氏本』は、白畑よし『当麻曼荼羅縁起』の模本について（『新修日本絵巻物全集』月報二二、角川書店、一九七七）において若干の紹介があるのみである。

(3) 註(1) 文献一〇一頁

(4) 註(1) 文献一〇九頁

(5) 日並彩乃「近世の土佐派と復古大和絵―「復古大和絵」の定義の問題―」（『東アジア文化交渉研究』七、二〇一四）一五三頁

【附記】本論の発表に際して貴重な『当麻曼荼羅縁起』の掲載について御厚情を賜った、東京国立博物館および当麻寺に深く感謝申し上げます。

## 資料

# 『当麻曼陀羅縁起』模本 三本対比（全）

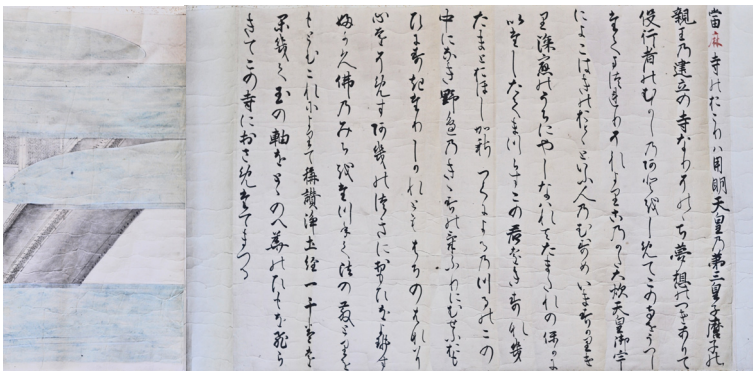
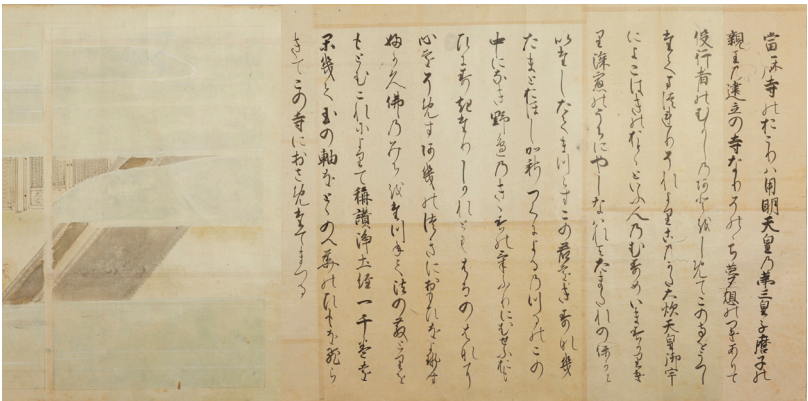
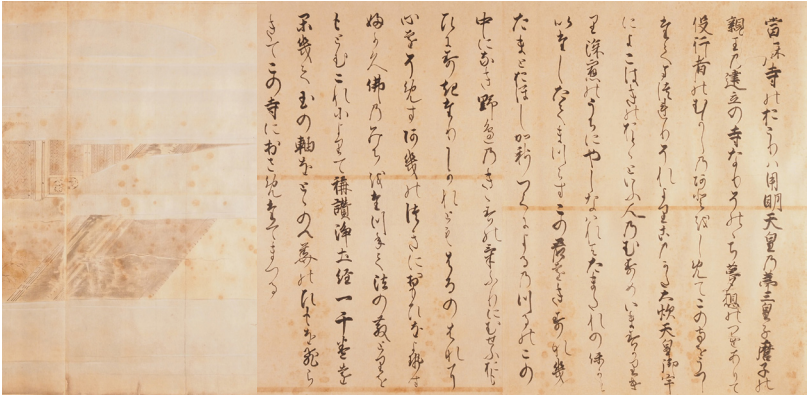
上：大本山光明寺蔵

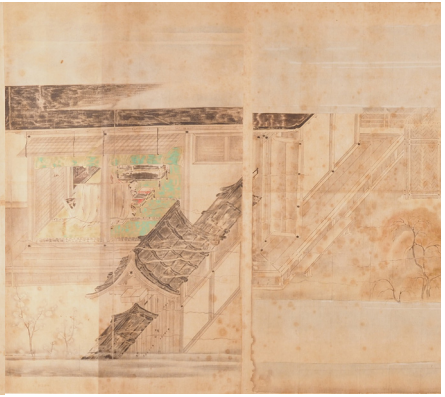
中：東京国立博物館所蔵 Image:JNM Image Archives

下：当麻寺奥院所蔵

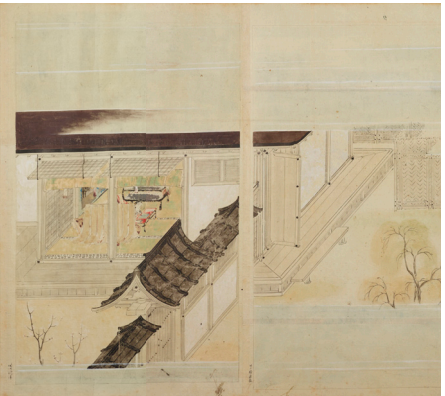


上卷

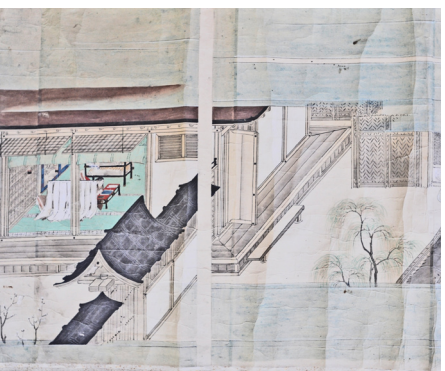




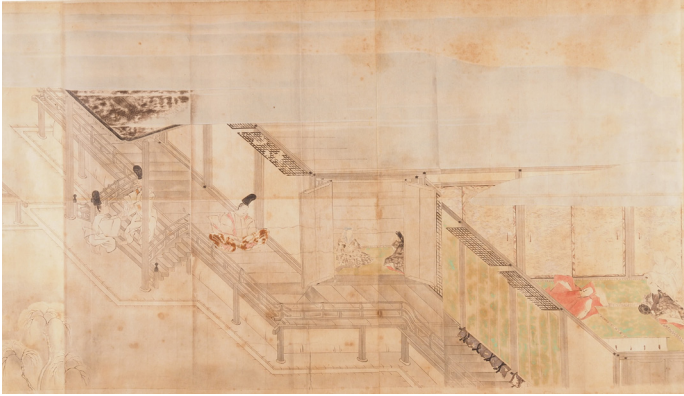
雨の、是天平寶字七年六月十五日降りて  
 されりありをたすし、其室のたりにあつ  
 けしれども、かいくいしく、まじり、せせら  
 をひきて、まは、あまの門をい、かき  
 ちふ七日の朝を、まは、一、心、誠、か、こ、こ、せり  
 一、ろ、あ、れ、い、因、月、日、り、ま、れ、此、屋、に、た、り、て  
 い、ま、祈、念、の、た、ら、う、か、え、あ、ま、隨、音、れ、た、り、ま、り、ま  
 を、ま、り、て、ま、ま、れ、に、た、り、れ、れ、九、品、の、教、を、ま  
 ね、た、ん、ま、り、ん、と、お、わ、い、わ、せ、れ、わ、ま、り、は  
 ち、つ、す、ま、り、に、ま、り、れ、ま、ま、百、餘、を、り、け、い、ひ、ま  
 といひ、願、望、の、は、に、れ、事、か、う、ま、く、天、懸、に、行、か、す



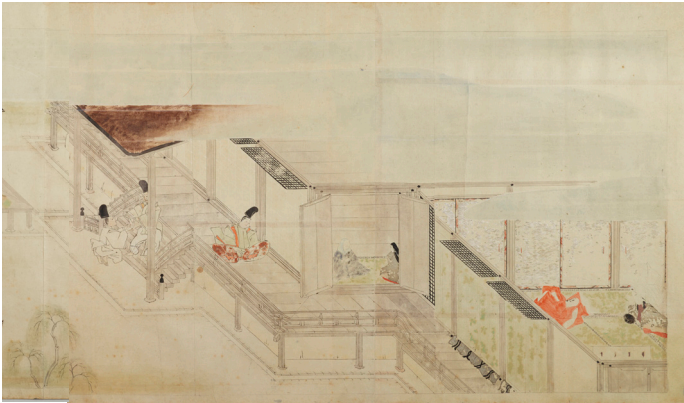
雨の、是天平寶字七年六月十五日降りて  
 されりありをたすし、其室のたりにあつ  
 けしれども、かいくいしく、まじり、せせら  
 をひきて、まは、あまの門をい、かき  
 ちふ七日の朝を、まは、一、心、誠、か、こ、こ、せり  
 一、ろ、あ、れ、い、因、月、日、り、ま、れ、此、屋、に、た、り、て  
 い、ま、祈、念、の、た、ら、う、か、え、あ、ま、隨、音、れ、た、り、ま、り、ま  
 を、ま、り、て、ま、ま、れ、に、た、り、れ、れ、九、品、の、教、を、ま  
 ね、た、ん、ま、り、ん、と、お、わ、い、わ、せ、れ、わ、ま、り、は  
 ち、つ、す、ま、り、に、ま、り、れ、ま、ま、百、餘、を、り、け、い、ひ、ま  
 といひ、願、望、の、は、に、れ、事、か、う、ま、く、天、懸、に、行、か、す



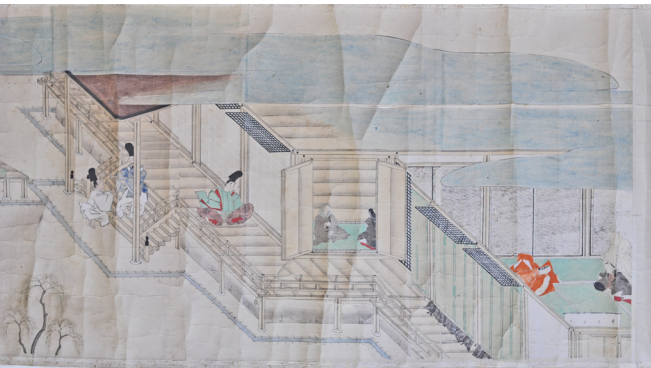
雨の、是天平寶字七年六月十五日降りて  
 されりありをたすし、其室のたりにあつ  
 けしれども、かいくいしく、まじり、せせら  
 をひきて、まは、あまの門をい、かき  
 ちふ七日の朝を、まは、一、心、誠、か、こ、こ、せり  
 一、ろ、あ、れ、い、因、月、日、り、ま、れ、此、屋、に、た、り、て  
 い、ま、祈、念、の、た、ら、う、か、え、あ、ま、隨、音、れ、た、り、ま、り、ま  
 を、ま、り、て、ま、ま、れ、に、た、り、れ、れ、九、品、の、教、を、ま  
 ね、た、ん、ま、り、ん、と、お、わ、い、わ、せ、れ、わ、ま、り、は  
 ち、つ、す、ま、り、に、ま、り、れ、ま、ま、百、餘、を、り、け、い、ひ、ま  
 といひ、願、望、の、は、に、れ、事、か、う、ま、く、天、懸、に、行、か、す



に無海連小松をく 近江國村謀使してまゝも  
 小松をく 阿川地たりく 化居のり  
 とききわ三川く ちかれら記たりてい  
 さまわつれが ち、わくまらま  
 王入て阿まこと 誠まり

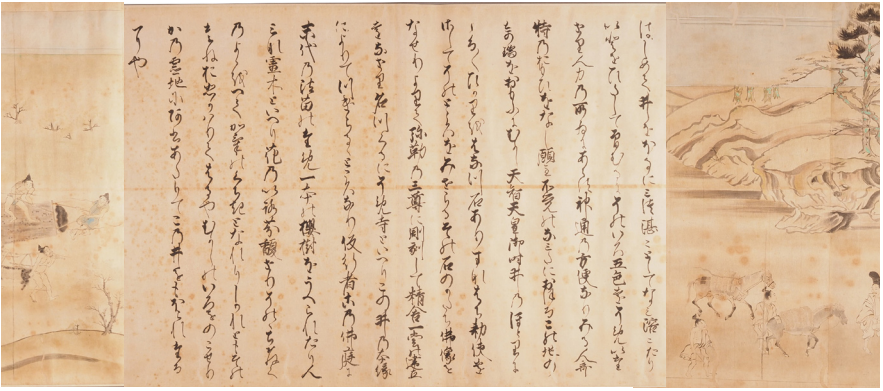


に無海連小松をく 近江國村謀使してまゝも  
 小松をく 阿川地たりく 化居のり  
 とききわ三川く ちかれら記たりてい  
 さまわつれが ち、わくまらま  
 王入て阿まこと 誠まり

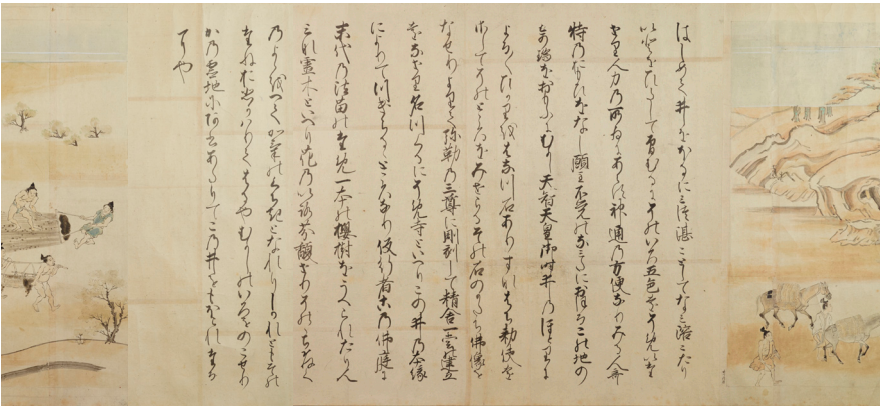


に無海連小松をく 近江國村謀使してまゝも  
 小松をく 阿川地たりく 化居のり  
 とききわ三川く ちかれら記たりてい  
 さまわつれが ち、わくまらま  
 王入て阿まこと 誠まり

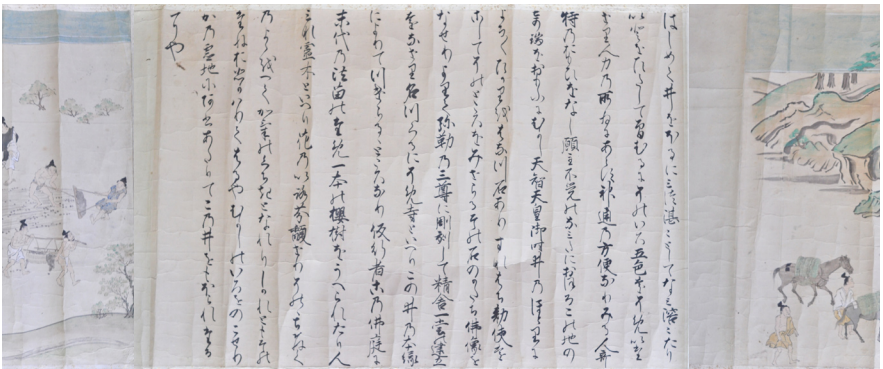




はしめく井をわらうに三陸ミヤヤ打と澄たり  
 は心をいりて看むるにそれの五色を才地とせ  
 せり人力の両方ありは神通の方便ありある人  
 特のなれいな願を承けふにむらむこれ地の  
 奇蹟をおしむり天智天皇御時井乃ほり  
 よろくはつと望まぬ川石ありすれども勅使を  
 申すそれとふをみせらるる井石のりも佛像を  
 なせりも是と弥勒の三尊に剛刹して精舎五雲堂五  
 尊を安置せらるるに才地寺といふこの井乃金像  
 によりていせらるるにあり候者未乃佛殿  
 未代乃法道此を地一本は櫻樹をうとれたり人  
 三乳霊木といひ地乃以務茶観するのりたなく  
 乃より深く望まぬら記たなれり一のれとされ  
 せぬ木あつりくもわむりけるものこり  
 か乃地地小石あつりてこの井とよまはれま  
 たりや

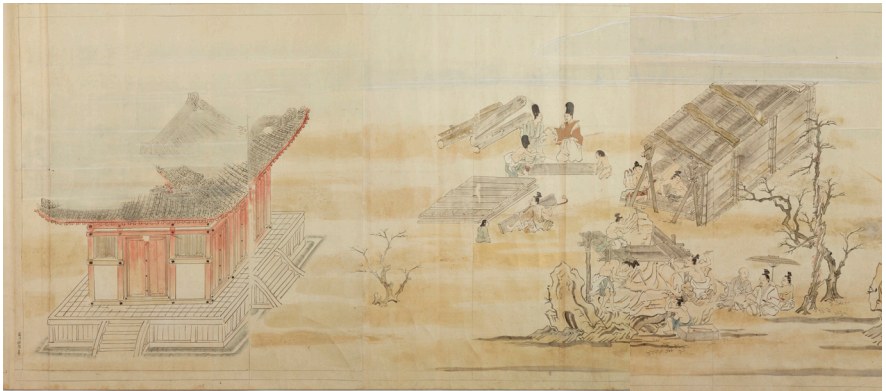
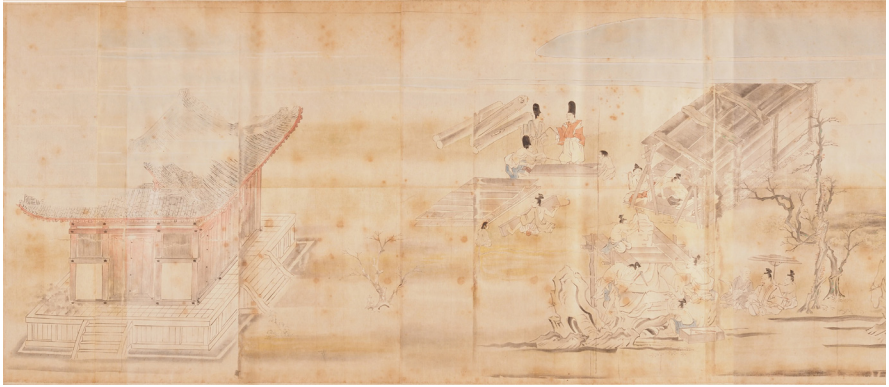


はしめく井をわらうに三陸ミヤヤ打と澄たり  
 は心をいりて看むるにそれの五色を才地とせ  
 せり人力の両方ありは神通の方便ありある人  
 特のなれいな願を承けふにむらむこれ地の  
 奇蹟をおしむり天智天皇御時井乃ほり  
 よろくはつと望まぬ川石ありすれども勅使を  
 申すそれとふをみせらるる井石のりも佛像を  
 なせりも是と弥勒の三尊に剛刹して精舎五雲堂五  
 尊を安置せらるるに才地寺といふこの井乃金像  
 によりていせらるるにあり候者未乃佛殿  
 未代乃法道此を地一本は櫻樹をうとれたり人  
 三乳霊木といひ地乃以務茶観するのりたなく  
 乃より深く望まぬら記たなれり一のれとされ  
 せぬ木あつりくもわむりけるものこり  
 か乃地地小石あつりてこの井とよまはれま  
 たりや

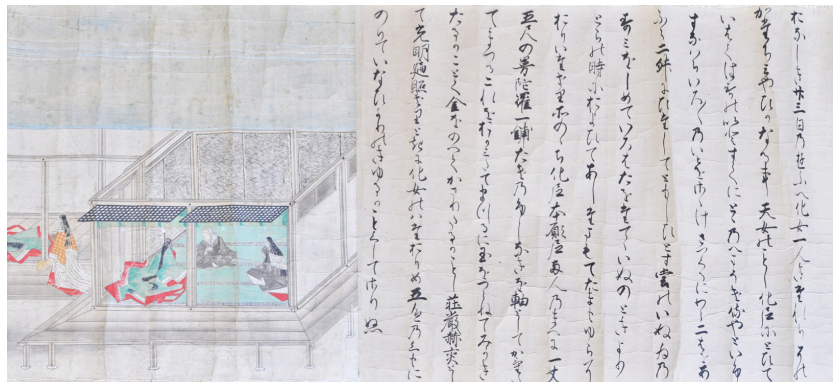
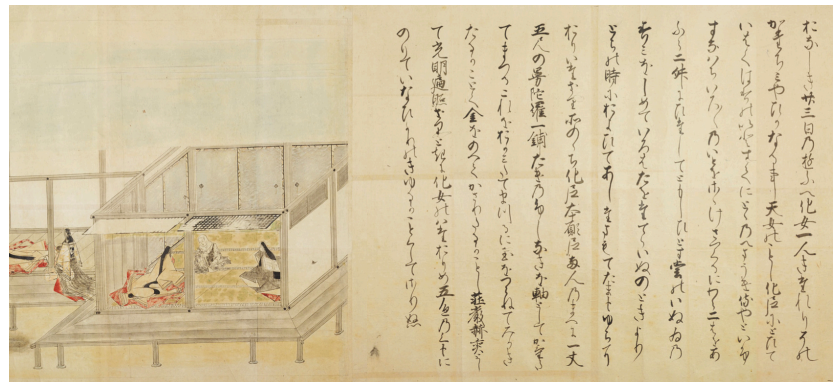


はしめく井をわらうに三陸ミヤヤ打と澄たり  
 は心をいりて看むるにそれの五色を才地とせ  
 せり人力の両方ありは神通の方便ありある人  
 特のなれいな願を承けふにむらむこれ地の  
 奇蹟をおしむり天智天皇御時井乃ほり  
 よろくはつと望まぬ川石ありすれども勅使を  
 申すそれとふをみせらるる井石のりも佛像を  
 なせりも是と弥勒の三尊に剛刹して精舎五雲堂五  
 尊を安置せらるるに才地寺といふこの井乃金像  
 によりていせらるるにあり候者未乃佛殿  
 未代乃法道此を地一本は櫻樹をうとれたり人  
 三乳霊木といひ地乃以務茶観するのりたなく  
 乃より深く望まぬら記たなれり一のれとされ  
 せぬ木あつりくもわむりけるものこり  
 か乃地地小石あつりてこの井とよまはれま  
 たりや

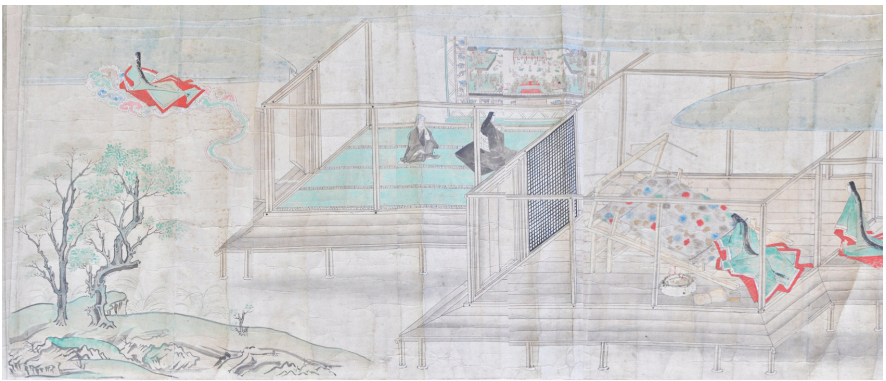
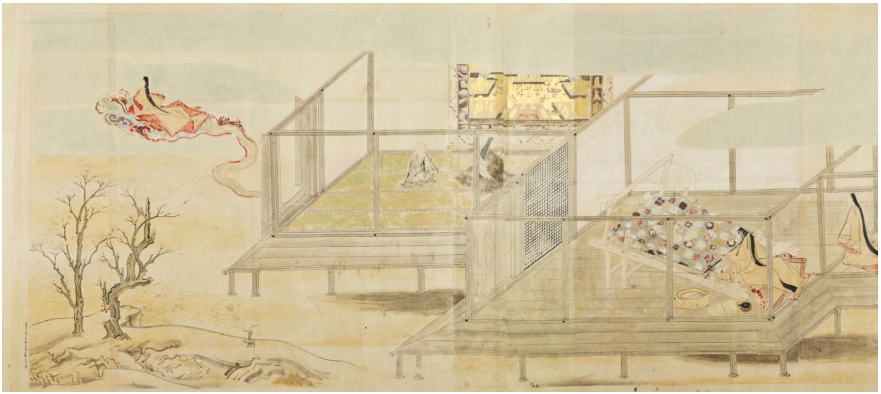
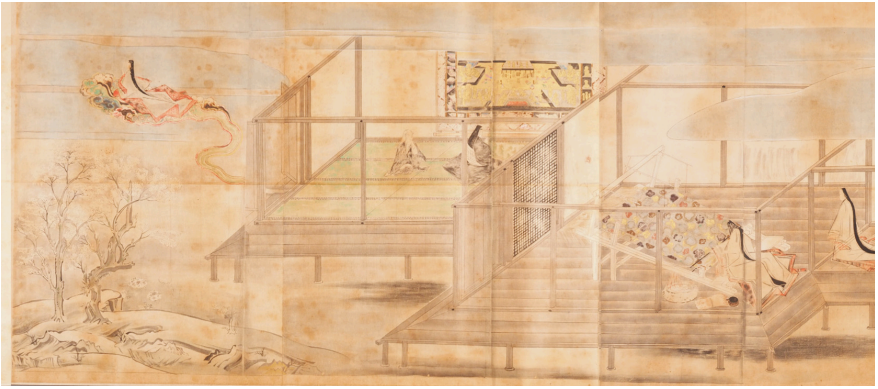




# 下巻







化后此像に深義をこめてよく南のへりにを  
 席分を両羅を新小けたりよは三昧心交れむを  
 のへ中堂小の十の願乃海立相かとのへ下方  
 には上中下品に未達の義がけくちりまなりこれ  
 をさきよふまこ二のりくをしむるといふと心  
 九品乃五小のうけのりよ本願にけけりく  
 二の事をおく小に跡能に智願より大聖の空通  
 かりとまへりすれもこれま少れぬ未かたわ  
 りまをすけいも極樂に莊嚴をみるにあらずや  
 赤くに化后に向陽をけけりていそく

注首迦葉流法濟 治基今來傳事 佛觀聖教教米  
 一入具場永離苦

二の偶をさくくがれんをたかりたさしり  
 ますよ地小本願にさくくすれ由未かこ少  
 化后のいそくまの西方極樂に教まなわたり  
 け右脇に弟子觀音なりといはく西方をりてま  
 ぬすれもれをたにちててかこいふま  
 はかりましてのふいあまこまをまの けま  
 見たがまのいけりしをりて未だ教りませり



化后此像に深義をこめてよく南のへりにを  
 席分を両羅を新小けたりよは三昧心交れむを  
 のへ中堂小の十の願乃海立相かとのへ下方  
 には上中下品に未達の義がけくちりまなりこれ  
 をさきよふまこ二のりくをしむるといふと心  
 九品乃五小のうけのりよ本願にけけりく  
 二の事をおく小に跡能に智願より大聖の空通  
 かりとまへりすれもこれま少れぬ未かたわ  
 りまをすけいも極樂に莊嚴をみるにあらずや  
 赤くに化后に向陽をけけりていそく

注首迦葉流法濟 治基今來傳事 佛觀聖教教米  
 一入具場永離苦

二の偶をさくくがれんをたかりたさしり  
 ますよ地小本願にさくくすれ由未かこ少  
 化后のいそくまの西方極樂に教まなわたり  
 け右脇に弟子觀音なりといはく西方をりてま  
 ぬすれもれをたにちててかこいふま  
 はかりましてのふいあまこまをまの けま  
 見たがまのいけりしをりて未だ教りませり



化后此像に深義をこめてよく南のへりにを  
 席分を両羅を新小けたりよは三昧心交れむを  
 のへ中堂小の十の願乃海立相かとのへ下方  
 には上中下品に未達の義がけくちりまなりこれ  
 をさきよふまこ二のりくをしむるといふと心  
 九品乃五小のうけのりよ本願にけけりく  
 二の事をおく小に跡能に智願より大聖の空通  
 かりとまへりすれもこれま少れぬ未かたわ  
 りまをすけいも極樂に莊嚴をみるにあらずや  
 赤くに化后に向陽をけけりていそく

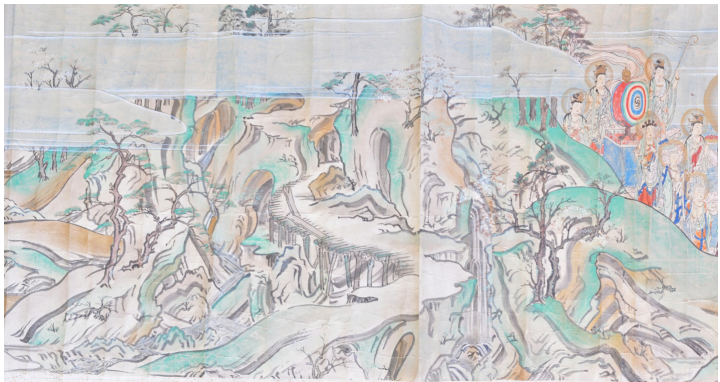
注首迦葉流法濟 治基今來傳事 佛觀聖教教米  
 一入具場永離苦

二の偶をさくくがれんをたかりたさしり  
 ますよ地小本願にさくくすれ由未かこ少  
 化后のいそくまの西方極樂に教まなわたり  
 け右脇に弟子觀音なりといはく西方をりてま  
 ぬすれもれをたにちててかこいふま  
 はかりましてのふいあまこまをまの けま  
 見たがまのいけりしをりて未だ教りませり









## 平成二八年度彙報

○平成二八年六月二五日

研究会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、石川琢道、山澤眞弘  
設立準備。業務分享の確認。

○平成二八年八月二日

光明寺寺宝の調査（於光明寺）

〈出席〉林田康順、成田善俊、石川琢道、大橋雄人

○平成二八年八月一九日

研究会（於光明寺）

〈出席〉林田康順、成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳  
文化財等目録の確認及び整理。

○平成二八年一〇月一日

研究会（於光明寺）

〈出席〉成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之  
寺宝目録の整理。

○平成二八年一月一八日

国宝館寄託品の調査（於鎌倉国宝館）

〈出席〉成田善俊、大谷慈通、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

○平成二八年一月二五日

国宝館寄託品の調査（於鎌倉国宝館）

〈出席〉成田善俊、大谷慈通、杉浦尋徳、山澤眞弘

○平成二八年二月一日

『光明寺目録（仮）』の校正（於光明寺）

〈出席〉成田善俊、杉浦尋徳、山澤眞弘

○平成二八年二月八日

光明寺蔵『大蔵經』の調査（於光明寺）

〈出席〉林田康順、成田善俊、大谷慈通、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

○平成二九年一月二四日

国宝館寄託品の調査（於鎌倉国宝館）

〈出席〉成田善俊、大谷慈通、杉浦尋徳、山澤眞弘

○平成二九年二月一六日

研究会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之  
平成二八年度事業報告・決算、平成二九年度事業計画・予算の検討。

○平成二九年二月二四日

第一回公開研修会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之  
基調講演

柴田哲彦台下「浄土宗三祖良忠上人鑽仰―伝法の視点から―」  
特別展示

光明寺寺宝「明版嘉興大藏經」「当麻曼陀羅縁起」「浄土八祖図」  
公開什物の紹介（林田康順）

○平成二九年三月七日

研究会（於光明寺）

〈出席〉成田善俊、大谷慈通、大橋雄人、杉浦尋徳、吉川瑞之

浄土宗総合学術大会における『当麻曼陀羅縁起』の研究発表を協議。

## 平成二九年度彙報

○平成二九年四月二七日

研究会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、大谷慈通、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

平成二九年度事業について検討を行い、以下の四点の実施を決定した。

①平成二九年度浄土宗総合学術大会における光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』諸異本・各種模本の研究発表。

②大本山光明寺什物一覧（一）「鎌倉国宝館寄託古文書・典籍一覧中世編」の作成。

③『記主禪師研究所紀要』第一号の刊行。

④鎌倉国宝館寄託資料の整理。

○平成二九年五月三〇日

研究会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、大谷慈通、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

光明寺蔵『当麻曼陀羅縁起』の撮影

（正行寺白石隆弘師）。浄土宗総合学術大会における研究発表内容の検討。

○平成二九年六月二日

研究会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、大谷慈通、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

同日行われた運営委員会において決定した以下の三点について説明および実施方法について検討。

①蓮馨寺兼原恒久師「歴代璽書」複製本の寄贈について。

②『記主禪師研究所紀要』の毎年刊行について。

③平成二九年度浄土宗総合学術大会における研究発表（大谷慈通・杉浦尋徳）。

○平成二九年八月二日

研究会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成

田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

総合学術大会発表原稿の最終調整。

特別公開研修会の実施方法について検討。

○平成二十九年九月六日

浄土宗総合学術大会（於大正大学）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

浄土宗総合学術大会にて研究発表。

大谷慈通「新出『当麻曼陀羅縁起』模本について（一）」模本流伝の経緯とその背景」。杉浦尋徳「新出『当麻曼陀羅縁起』模本について（二）」三種の模本との比較を中心に」。

○平成二十九年一〇月八日

研究会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄

人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

特別公開研修会の実施方法および同日開催特別展での展示内容の検討。

○平成二十九年一月二四日

光明寺寺宝の調査（於鎌倉国宝館）

〈出席〉成田善俊、大谷慈通、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

特別展における展示物の調査。

○平成二十九年一月二八日

特別公開研修会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

基調講演

柴田哲彦台下「五重伝法再考」

特別展示

光明寺寺宝「良忠護状」「良忠附法状」「松蔭硯」「南岳大師竹布九条袈裟」

公開什物の紹介（大橋雄人）

○平成三〇年一月八日

研究会（於光明寺）

〈出席〉成田善俊、大谷慈通、大橋雄人、杉浦尋徳、吉川瑞之

平成三〇年度事業について検討を行い、以下の九点の実施を決定。

- ①良忠著『行者用意問答』の輪読。
- ②然阿良忠上人伝記の整理及び研究。
- ③浄土宗総合学術大会における研究発表。
- ④『記主禪師研究所紀要』第二号の作成。
- ⑤平等院蔵『当麻曼陀羅縁起』模本の調査。
- ⑥大本山光明寺什物一覧（一）「鎌倉国宝館寄託古文書・典籍一覧 中世編」の作成。
- ⑦鎌倉国宝館寄託資料の整理。
- ⑧記主禪師研究所公開研修会の開催。
- ⑨東京教区、常照院野村恒道師による光明寺文書の輪読。



○平成三〇年一月二〇日

「光明寺寺宝の調査（於鎌倉国宝館）」

〈出席〉成田善俊、大橋雄人

特別展における中世文書の調査。

○平成三〇年一月二二日

第二回公開研修会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

基調講演

宇高良哲先生「光明寺文書について―中世文書を中心に―」

特別展示

光明寺寺宝「寂恵良曉授良誉定恵

附法状」「良誉定恵授良順聖滿附

法状」「良順聖滿授順誉了專附法

状」「順誉了專授常誉良吽附法状」

「寂恵良曉述聞副文」「足利義詮御

教書」「鎌倉御所足利基氏御教書」

「後土御門天皇論旨」「上杉顯定書

状」「某印判状」「豊臣秀吉禁制」

「鎌倉代官大道寺盛昌寄進状」

「北条氏康印判状」

○平成三〇年二月二四日

研究会（於光明寺）

〈出席〉成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、吉川瑞之

『記主禪師研究所紀要』第一号の編集。浄土宗総合学術大会における研究発表の協議。

○平成三〇年三月二五日

研究会（於光明寺）

〈出席〉長谷川昌光、林田康順、成田善俊、大谷慈通、石川琢道、大橋雄人、杉浦尋徳、山澤眞弘、吉川瑞之

研究紀要編集会議

同日、光明寺寺宝展の公開講座（第一回）

が開催され、大谷慈通研究員が「大本山光明寺蔵国宝『当麻曼陀羅縁起』について―新出模本（江戸期）を通して―」と題して講演を行った。

# 大本山光明寺記主禪師研究所 規則

## 【名称】

第一条 本研究所は大本山光明寺記主禪師研究所〔略称…記主研究所〕（以下、研究所という）と称し、大本山光明寺の所属団体とする。

## 【事務局】

第二条 研究所の事務局は大本山光明寺教務部内に置く。

## 【目的】

第三条 研究所は浄土宗第三祖・大本山光明寺開山記主禪師然阿良忠上人を中心に二祖三代の顕彰と研究に励むことを目的とし、浄土宗及び大本山光明寺の興隆に努める。

## 【事業】

第四条 研究所は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 一 大本山光明寺所蔵文書の調査・整理・研究
- 二 良忠上人著作の普及
- 三 前条の目的に沿った各種研修会の開催

## 【総裁】

第五条 研究所は大本山光明寺法主を総裁として推戴する。

- 2 総裁は研究所長、主任研究員を任命する。
- 3 総裁は運営委員および監事を任命する。

## 【運営委員会】

第六条 研究所には運営委員会を置き、研究所の基本方針を決定する。

2

運営委員は研究所長、大本山光明寺執事長、教務部長、主任研究員、事務局長を以てこれに充て、研究所長が委員長に就任し、委員会の議長を務める。運営委員会は原則として年2回開催し、研究所の事業計画・人事計画及び予算を決定し、決算を承認する。

3

## 【監事】

第七条 監事は大本山光明寺財務部長を以てこれに充て、会計を監査する。

## 【所員】

## 第八条

本研究所の所員は次の通りとする。

- 一 所長は研究所を代表し、所務を統理する。所長は、研究員・事務局長・事務局員を指名し、総裁が任命する。

二

主任研究員は研究所が行う研究活動を統括指揮する。研究員は若干名とする。研究員は、研究所の研究に従事する。

四

事務局長は、研究所の事務・会計を掌握する。事務局長は研究員を兼ねることができる。

五

事務局員は若干名とする。事務局員は研究所の事務・会計に従事する。事務局員は研究員を兼ねることができる。

## 【任期】

## 第九条

所員の任期は4年とする。但し再任を妨げない。補欠により就任した者の任期は前任者の残任期間とする。

## 【退所】

第十条 所員による申し出ある時は研究所を退所することができる。

## 【会計】

第十一条 研究所は大本山光明寺の助成金、その他収入により運営する。

第十二条 研究所の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わることとする。

## 【規則の改廃、細則】

第十三条 本規則の改廃は運営委員会の議を経なければなら

ない。  
第十四条 本規則を実施するについて必要な細則は別に定める。

【附則】 本規則は平成28年4月1日より施行する。

## 記主禪師研究所 運営委員

平成 30 年 3 月 31 日現在

総 裁	柴田 哲彦	台下
運営委員長	長谷川昌光	
運営委員	里見 嘉嗣	林田 康順 奥田 昭應 成田 善俊
監 事	瀬高 順教	

## 記主禪師研究所 所 員

平成 30 年 3 月 31 日現在

所 長	長谷川昌光			
主任研究員	林田 康順			
研 究 員	成田 善俊	大谷 慈通	石川 琢道	大橋 雄人
	杉浦 尋徳	吉川 瑞之		

## 執 筆 者 紹 介

掲載順・平成 30 年 3 月 31 日現在

柴 田 哲 彦	台下	大本山光明寺法主
大 谷 慈 通		記主禪師研究所研究員
杉 浦 尋 徳		記主禪師研究所研究員



## 編集後記

- \* 『記主禪師研究所紀要』第1号をお届けします。
- \* 第1回公開研修会の基調講演録として、柴田哲彦台下「浄土宗三祖良忠上人讃仰一伝法の視点から」を収録しました。
- \* 研究成果として論文2本と『当麻曼陀羅縁起』模本の三本対比を掲載しました。
- \* 今後、大本山光明寺および記主禪師研究所の発展のため、研究員一同、研鑽を積んで参ります。皆様のご支援・ご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

(編集部)

### 記主禪師研究所紀要 第1号

平成30年7月6日 発行

編集発行 記主禪師研究所

〒248-0013 神奈川県鎌倉市材木座 6-17-19

浄土宗大本山光明寺内

TEL 0467-22-0603 FAX 0467-22-0622

印刷 有限会社 うさぎや印刷 神奈川県鎌倉市材木座 1-1-1